

---

# 遊戯王GX ~無限の地獄~

しゃれこうべ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX～無限の地獄～

### 【Zコード】

Z2610P

### 【作者名】

しゃれじゅべ

### 【あらすじ】

シンクロって・・・なんだよそれ・・・  
正直乗り気じゃねえが、あの人の顔を立ててやるかな。

しつかしデュエルアカデミアか・・・満足させてくれよ？

## 第一話 入学試験、そしてトヨエルー！（前書き）

初投稿です。

遊戯王のうらを見て、自分でも書きたいとおもって書きました。

下手な文ですが、宜しくお願いします

感想、まつてます。

## 第一話 入学試験、そしてテュエル！！

「・・・・・」

はあ・・・・・帰りたい・・・

「これで終わりだ！－、トライホーンドラゴンの攻撃－－！」

「つああああああーー！」

L P 1 2 0 0 0

「ありがとうございました・・・・・」

試験官負けた生徒はトボトボと段を降りていった。

「ふん、まつたく・・・骨のある奴はいないのか？次、試験番号5  
6番－－。」

俺だ  
・  
・  
・  
・  
。

「はい」

鬱だ・・・なぜ俺がデュエルアカデミアなぞに・・・

時は遡り、一週間前・・・・

俺はある人に呼ばれ、その場にいた。  
そしてそこで重大なことを言われた。

「たゞ?」

「聞こえなかつたのか？ デュエルアカデミアに行けと言つてゐるのだ」

そんなことはわかっている。

「・・・なぜですか？」

田の前の男は後ろを向いたまま、淡々と言つ。

「今、我が社は新たな発展を見せよ!としている」

「・・・」

「それはおそらく、このテクノエル界を大きく変化させる」とだらつ  
「!」

「・・・」

「その新たな発展・・・それは『シンクロ』だ!」

「・・・シンクロ?」

この人が言つことを俺はさつきからずつと聞き流していたのだが、そこで少し興味を持つた。

「ふうん……やはり気になるだらうへ。」

「…………まあ」

「よかうひ、では教えてやる…………まあ、シンクロといつのは  
チューナーといつ……」

そこで俺は偉そうに説明をする人の話を聞いていた。

シンクロ……それはカードの新たな可能性。  
チューナーと呼ばれるモンスターから生まれる特殊な召喚。

説明された話を簡潔に述べるとこんな所だらう。

「だがこのシステムにはまだ不備がある……そこで、お前にはこのデッキを使い、デュエルアカデミアに入學してシンクロのテストをしてもいいとこ  
うわけだ！！

「……受け取れえ！！」

「ひ

そういうつて俺に「テッキケースを投げてくれる。パシッ」と手でそれを取り、中を見てみた。

「……なんだこのカードは？」

今まで見た事のないカードばかり……だった。

「そのデッキはシンクロの為のデッキ、試作品だ。  
つまりそのデッキは世界に一つしかない、お前のデッキだ」

「…………」

「手続きはもう終わらせたある・・行くがいい！  
行つて我が社の結果を見せびらかせろッ！！！」

~~~~~

ついわけで今俺は『トコエルスペース』・・・よつする広場の真ん中  
にいる。

田の前に立つのばかりおっしゃ。試験官だな。

「さて・・・次は貴様だな?」

新たな獲物を見つけたような田で、じらりを見てくる。  
止めるよ氣持ち悪い・・・

「わざと終わらせるや・・・『トコエル!』

「トコエル・・・」

正直やる気はほとんどねえけど・・・ま、あの人の頼みだし、仕方  
ないか

試験官 LP4000

??? LP4000

「私のターンからだ！…、ドロー！…！」

「なんかつこつけてドローすんなよ…・・・カード痛めるぞ？」

「私は手札から《クリッター》を守備表示で召喚！…」

場に三つ田のきしょいモンスターが現れる。

「カード一枚セット…・・・ターンエンド！…」

試験官 手札4

クリッター（守備）

伏せ 1

さて・・・俺のターンか

「ドロー！」

普通にドローする。

居合い抜きのような腕を大きく振り回すドローなんてしないよ？

「・・・・・」

相手の場と手札を見ながら展開を考える。

クリッター・・・墓地に行つたときに攻撃力1000以下をサーチするモンスターか。  
そして伏せが1・・・・。

様子見もいいが・・・これは相手の出方を見るとじよつ

「俺は手札から、《インフルニティ・ビースト》を召喚つ」

首辺りに縁の玉のようなものをつけた犬が現れる。

俺のモンスターを見るやいな、会場が少し騒ぎ出す。

「なんだ？あのカード？」「かつこいにな〜」「インフルノ？」「うわ〜〜！見たことのないカードだ！！」「兄貴、うるさいっす・・・」

・・・ま、見たことがないのは当たり前だつた・・・これ世界に一枚しかないんだし。

インフルニティ・・・それが俺があの人にもらつたデッキだつた。こいつらのカード群は面白い効果を持っているんだが・・・それは後のお楽しみだな。

「・・・・バトル」

うかつにカードを出せばアドを取られてしまう可能性がある。

・・ここは慎重に、だな。

「《インフルニティ・ビースト》で、クリッターに攻撃、ヘル・ハウリング！！」

突進し、爪でクリッターを切り裂くと、あっけなくクリッターは破壊された。

「ふん・・・この瞬間クリッターの効果を発動！・・・デッキから《マシュマロン》を持つてくる！・・・」

壁モンスター・・・どうでもいいさ・・・。

「……………ターンハンマー！」

？？？ 手札 5

インフルーティ・ビースト

伏せ〇

「私のターン！……………」

なんだ？良いカードでも引いたか？

「私は《マシュマロ》を守備表示で召喚……」

場に文字通りマシュマロのよつなモンスターが現れる。

・・・・マジックマロンを表す備つなぜだ？

「ふふふ・・次のターンを楽しみにしておけ・・・ターンハンマー！」

「！」

試験官 手札 5

場 マシュマロン

伏せ 1

「…………ドロー」

どんな考えがあるか知らんが…

「…………」

さて……どうやらマシュマロンを表で出したのはプレイングミスではなにようだ。

とすると次のターンのモンスター召喚のための布石？

だがそれでは表で出す意味がわからない。

となると気になるのは奴のリバースカードだな。

「…………手札から速攻魔法、《サイクロン》を発動、  
その伏せを破壊する」

気になる。ならば除去。簡単だ。

だが相手の試験官は俺がサイクロンを発動したのを見て笑う。

「ふふふ・・甘いなあ・・・貴様が破壊したカードは・・・これだ・・・  
リバースカードオープン・・・『弱肉強食』・・・」

伏せられていたカードが開かれた。

「・・・『弱肉強食』?」

「『』のカードはセットされた状態で破壊され、自分の場に攻撃力5  
00以下のモンスターがいるときに発動する・・・」

破壊されることで効果を得るカード・・・か。

この発動条件を満たすため、マシユマロンを表で出したのか・・・。  
マシユマロンは戦闘耐性を持つ・・よつてこのカードを破壊していく  
るのは解っていたといふことか。

「『』のカードの効果は、自分の場のモンスター一体を手札に戻すこ  
とで、手札から『』4モンスターを一体、特殊召喚する」とができる  
る!・!  
来い!・、『レインボーフィッシュ』・・・」

マシュマロンが光となつて消え、変わりに七色に輝く魚が姿を現した。

「さらに、このカードが相手によつて破壊された場合・・・相手はラ  
ンダムに手札を一枚捨てなければならない！！  
さあ、一枚墓地に送れ！！」

「ち・・・・・」

俺は手札を裏返し、軽くシャッフル。そして一枚を選び、墓地に送  
つた。

「うかつに破壊したのが間違いだつたなあ？・・新入生君よ？」

「・・・・・・・・・」

インフェルニティ・ビーストの攻撃力は1600・・・レインボーフィッシュの1800には届かない・・か。

「・・・俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド」

？？？ 手札 2

場 インフェルニティ・ビースト

伏せ 1

「私のターン、ドロー！···手札から、《シーザリオン》を召喚！！」

シーザリオン ATK1800

今度はウツボに似たこれまできしょいモンスターが出てきた。

「バトルだ！！···《シーザリオン》で、《インフェルニティ・ビースト》に攻撃！！  
アクアショット！！」

わせるかよつ

「永続トラップ発動、《テプス・アノマレット》！！」

「むうー!?

エフェーストの前に奇妙なアミコレットが現れる。

「UJのカードは、相手の攻撃を手札一枚捨てる」とにより無効にするカード・・・

手札を一枚捨て効果を発動、《シーザリオン》の攻撃を無効」

口から何かを発射しようとしていた《シーザリオン》はそのまま何もせず、元の態勢に戻る。

「ならばもう一度だ!..《レインボーフィッシュ》で攻撃!..」

「再び《デプラス・アミコレット》の効果を発動、手札を捨て、攻撃を無効!」

再び攻撃を無効化する。

・・・・これで俺の手札は0になつた。

「そこまでしてそのモンスターを守りたいのか?・・・カードを一枚伏せ、ターンエンド!..」

試験官 手札 3

場 シーザリオン ATK1800

レインボーフィッシュ ATK1800

伏せ 2

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の場にはエフ・ビースト、そして永続トラップの『テプラス・アミュレット』のみ。

手札は0・・・さあて、あのカード引けるかなつと。

「ドロー・・・・・・《強欲な壺》を発動」

この場合には来て欲しくはなかつたカードだぜ・・・。  
俺は山札から2枚ドローする。

「デッキから2枚を引く・・・・ち」

お前かよ・・・ま、いいがな。

「俺は場の『IF・ビースト』を生け贋に捧げ・・・」

IF・ビーストは足から消えていく。

「現れる・・・『インフェルニティ・デストロイヤー』！」

IF・デストロイヤー

ATK2300

そして現れるのは奇妙な姿の巨人・・デストロイヤーといつ名がふさわしい。

こいつが出るとまた会場は騒ぎ出す。

「なんだ・・・このモンスターは・・・」

あんたも驚いてんじゃねえよ・・・これ事故なんだからよ。

「バトルだ……『IF・デストロイヤー』で、『シーザリオン』  
を攻撃！！

デストロイ・スラッシュ！」

その手に付いている大きな爪でシーザリオンを切り裂く。

「ぐう・・・！」

試験官 LP4000 3500

「・・・・・ターン、エンド」

？？？ 手札1

場 IF・デストロイヤー

デプス・アミュレット

「たかが500…痛くも痒くもないわ！、私のターン…！」

シユツと、格好つけてドロー。なにがいいんだろ？一体？

「それがお前の切り札か？？？たった攻撃力2300なんぞ、私の敵ではない！！」

見るがいい・・・これが切り札というものだ！！

私は、『レインボーフィッシュ』を生け贋に捧げ・・・来い！！、『ジエノサイドキングサーモン』！！」

レインボーフィッシュが消え、鮭が現れた。  
鮭だぞ鮭。

「ふふふ・・・・」

「・・・どうしました？」

「お前はおそらく、そのトラップで今の場をしのぐつもりだろ？が・  
・・そうはいかんぞ！！」

手札から、『死者蘇生』を発動！！、墓地の『シーザリオン』を、  
特殊召喚！！」

再び現れるシーザリオン。

「さらりとラップ発動！！『水靈術 葵』！！

このカードは、自分の場の水属性モンスターを一体生け贋に捧げ、相手の手札を一枚捨てさせるカード！！」

『シーザリオン』を生け贋に捧げ・・・わあ、その一枚も捨ててもらおう！！」

「・・・・・・

俺は一枚だった手札を墓地に捨てる。

「これでのトラップは発動できまい・・・バトルだ！！、『ジョンサイドキングサーモン』で、

『IF・デストロイヤー』を攻撃！！ ジェノサイドアップ！！」

まるで泳ぐように空間を進み、その尾ひれをIF・デストロイヤーに叩きつけた。

「ち・・・・」

? ? ? LP 4000 3900

「更に速攻魔法発動！！『滝登り』！！！」

自分の水属性モンスターが相手モンスターを破壊したとき、500

ポイントのライフを払う」とよつて魔法、罠カード一枚破壊することができる!!

私は500ポイント払い・・・『テプラス・アリュコレットを破壊!!』

試験官 LP 3500 3000

「ははははーーどうだ!! 貴様の場にはもうモンスターはないぞ?  
」

「・・・・・・・・・・・・

「壊す(デストロイ)なぞ甘い・・・物事は全て集団殺害。  
完璧に殲滅するべきなのだ」  
ジエノサイド

「・・・・・・・・・・・・

「ふん、だんまりか・・・カード一枚伏せ、私はターンエンド!」

試験官 手札1

場 ジエノサイドキングサーモン

伏せ 1

・・・・・・・・俺のターン

俺のフィールドには何もない・・・そして相手の場には攻撃力2400のモンスター・・・。

引け・・・あのカードを。

引いたカードを見る。

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
• ○

・・。

来たぞ・・・やつとな。

「俺が引いたカードは・・・『インフェルニティ・デーモン』だ」

「？・・・なんだそれは？」

「このカードは自分の手札が0枚時にドローした時、このカードを相手に見せる事で自分フィールド上に特殊召喚することができるカードだ」

「…なんだと…？」

「俺の手札は0・・・よつて、現れる、『IF・デーモン』…！」

山羊のような顔をした顔をし、魔術師のようなロープを纏った状態でIF・デーモンは現れた

「さりに・・・」のカードが特殊召喚に成功した時、自分の手札が0枚の場合、自分のデッキから「インフルーティ」と名のついたカード一枚を手札に加える事ができる！――

「――」

「俺が手札に加えるカードは・・・『インフルーティ・ネクロマンサー』」

「・・・・・・・・むう、また妙なカードを・・・」

「俺はまだ召喚を行っていない・・・よつて、手札より、『IF・ネクロマンサー』を召喚！――

それで・・・行きますか？

「『IF・ネクロマンサー』の効果を発動・・・自分の手札が0枚の時、自分の墓地に存在する

『インフルーティ』と名の付いたモンスターを一体、特殊召喚することができる！――

現れる！――、『インフルーティ・デストロイヤー』――

再び現れるエドストロイヤー。

「く・・・ フィールドも手札もの状態からここまでするとは・・・  
だがお前のモンスターの攻撃力では、  
俺のジエノサイドキングサーモンを倒すことはできんぞ！…？」

「問題はない・・・ 行くぞ」

「なに！？」

「墓地に存在する、《ADチョンジャー》の効果を発動！！  
このカードを除外することによって、フィールドのモンスター一體  
の表示形式を変更する…！  
俺は《ジエノサイドキングサーモン》の表示形式を、守備に変更！  
！」

「ばかな・・・ 《ジエノサイドキングサーモン》の守備力は100  
0・・・

「これでは破壊されてしまう…！」

「サーモンは背を丸くし、防御の態勢をとる。」

「バトルだ……『IF・デストロイヤー』で、『ゾキングサーモンを攻撃！－!』」

ズシャアと、ゾ・キングサーモンは切り裂かれた。

「く！…………だがここでトラップを発動！－!、『魚の散乱』！－!  
自分の水属モンスターが戦闘で破壊された時、次の自分のターンに、  
そのモンスターを特殊召喚することができる－!－!  
ははは、貴様のそのモンスターの攻撃を喰らつても私のライフはま  
だ1200ポイント残る・・。

そして貴様の場には最高攻撃力2300のモンスターのみ－!次の  
ターンでお前のモンスターを全滅させてやろう！－!

・・・・・ 哀れだなあ。

「無駄つすよ……あなたに次のターンはありません

「?・・・何を言つている?」

「あなたは『IF・デストロイヤー』の効果を知らない

「効果だと・・・?」

「う・・・」この効果は・・

「『ジエノサイドキングサーモン』を破壊したことにより、『IF・デストロイヤー』の効果を発動！！

自分の手札が0枚の時に相手モンスターを破壊し、墓地に送った場合・・・相手に1600ポイントのダメージを与える！！」

「！――！なんだとか――！」

「さつきこいつで破壊したときは手札が一枚あつたため発動出来なかつたが・・・これが俺の神髄、『ハンドレスコンボ』だ

「ハンドレス・・・コンボ・・・」

「さあ・・・1600ポイントのダメージを受けるがいい・・」

「ひ、ひ――・・・・・」

IF・デストロイヤーは試験官の前行き、そしてその爪で大きく試験官を切り裂いた。

「ぐわあああああーー！」

試験官 LP 3000 1400

「止めだ・・・《インフェルニティ・ティー・モン》の攻撃！！

空間に魔法陣が出現し、そこから炎で覆われた巨大な手が試験官を襲う。

「ぐはああああああああああああああ！」

試験官 LP14000

「あなたの・・・負けた」

~~~~~

ま、つーことがあつたわけだ。

あの後静まりかえった会場を後にし、あとは結果が出るのを待つだけだった。

なんか遅刻してきた生徒がどうとか騒いでいたようだが・・・どうでもいいだろう。

そういうえば・・・俺が会場を出ようとするとある人物と視線がぶつかった。

長い青色の髪・・・ほかの生徒とは違う制服・・・誰だこいつは？

しばらく俺はそいつを見ていたが、たいして興味もないでのそのまま帰つていった。

そして結果。

俺の色は青・・・オベリスク・ブルーだったか？

デュエル・アカデミアの一一番上の位になつたわけだ。

「・・・・・・これで満足か、『海馬社長さんよ』



## 第一話 テュエルッ！『E・HERO』使い（前書き）

「テュエルの内容を考えるのは好きです。

学校で腐るほどやつてるとんでもずが戦術とかはわかんないです。

12月5日

ちよいとかみ合わない描寫がございましたので修正しました。  
(手札の枚数など)

## 第一話 テュエルッ！『E・HERO』使い

『ふん・・・その「デッキなばロ」の試験面に負けたはずが  
なかろう、  
勝つて当然だ』

「・・・デュエル中の視線がうつと錯しかったのですけどね」

試験が終わり、翌日、晴れてオベリスクブルーの生徒となつた。  
俺は寮の鍵をもらい、ジェラルミンケースを片手に社長さんと電話  
で通話している。

『それはそうだろうな。なんせ我が社初のシンクロの「デッキなのだ  
からな！』

「・・・とは言つてもシンクロモンスターがなければどう  
がありませんが？』

この人、シンクロデータとか言っておきながらいざ確認してみると用心のシンクロとかいうカードが入っていなかつた。

それで話をしてこぬひづに寮についた。

123号室・・・・」とか。もはつた鍵を差し込み、扉を開ける。

「・・・・・・・・ひづ

尋常じやない広さ・・・・これが寮かよ・・・

『それは問題ない、昨日磯野によつてカードを送らせた。  
おそらく、もうお前の部屋に届いているはずだが?』

「?・・・・ああ、これですか」

見ると部屋のベッドの上に四角い小包が置いてあつた。  
俺はジエラルミンケースをテーブルに置き、その箱を開ける。

「・・・・これは・・・」

中に入つていたのはもちろんカード・・・。  
だがそのカードは今までにみたことのない色をしていた。

「白……これがシンクロモンスターですか？」

『そのとおりだ、そのカードが未来を変えるといつわけだ』

「…………」

入っていた枚数は3枚のモンスターカード。

「《スターダストドラゴン》、《レッヂモンズドラゴン》、《  
ワンハンドレッドアイドラゴン》  
・・・・すごいな」

どれも綺麗な絵柄だつた。

全てがドラゴン族というところが社長らしいといふかなんといふか・  
・・・。

『世界に一枚しかない……お前だけのカードだ……存分に使う  
がいい!』

「・・・ありがとうございます、社長」

でもなあ、正直こんなものもらつても将来使うかどうか……  
ああ、そういうばどつかの町に蟹みたいな髪をした子供がいたな、  
そいつにでもあげようかな。

いや、でも3枚あげるのはもつたいないし……あ、別の町にまたへんなガキいたな。

なんか『ぼくはしようらいマジック・アンド・ウイザーズの王者キングになるんだ!!』とか言つてたし、そいつにもあげよ。

『礼などいい、お前はこの俺、【海馬瀬戸】の養子なのだからな、  
「京介」よ』

「…………」

そう、俺はこの人についていった人間。

前の名前は捨てた、今の俺は【海馬 京介】だ。

『そろそろ仕事があるので切る、うまくやるがいい……俺はお前  
を買つているのだからな……ブツ』

「…………読めない人だ。  
…………さて。」

携帯電話を耳から離し、ポンッとベッドの上に投げる  
そしてジエラルミンケースから「テッキを取り出し、テーブルにカードを広げる。

知らない人はいないと思うが・・・一応俺の「テッキ」に入っているインフェルニティを簡単に教えておこう。

### まず《インフェルニティ・ビースト》

手札が0の時にこのカードがバトルしたとき、相手はダメージステップまで魔法、罠を発動させない効果をもつ。  
攻撃力も1600と、まあ普通だ。

### 次、《インフェルニティ・デーモン》

手札0でこのカードをドローした場合に特殊召喚できる。さらに手札が0の時に特殊召喚されたとき、「テッキ」から《インフェルニティ》と名の付いたカードをサーチすることができる。  
この「テッキ」の中心核となるカードだ。攻撃力は1800。高いほうだ。

### NEXT、《インフェルニティ・ネクロマンサー》

手札0で墓地から《インフェルニティ》と名の付いたモンスターを特殊召喚することのできるカード。

攻撃力は0だが守備力は2000と高い。

最後、『インフェルニティ・デストロイヤー』

（「モンスターを破壊したとき、相手に1600ポイントのダメージを与える効果だ。

LPは4000で1600削れるのはともい。

攻撃力も2300と、半上級モンスターには敵わないが、下級モンスターなら破壊できる。

昨日出したのはこんなところだ。

これ以外にもまだカードはあるが・・・全部説明するとあんた達も飽きたら思つし、飛ばされたら意味ないので楽しみにしていてくれ。

「レベルの合計が8か・・・」

インフェルニティのチューナー確認・・・。

あるいはレベルが2の『インフェルニティ・ビートル』、レベル1の『インフェルニティ・リベンジャー』

といふことはこいつらを使って・・・ん？

まてよ？ビートルのレベルが2といふことは、このカード以外で6にしなければいけないのか？

さて・・・6の組み合わせ・・・HF・ネクロマンサーの3と『HF・ドワーフ』の2、そして『HF・リローダー』・・・。

「……………」

「これじゃ 展開に時間が掛かる……もつと簡単なものは……  
「デーモンの4ヒドワーフの2だな。」

ふむ…………難しい。

「ノンノンッ

そんな感じで「テック」の解析と構築をしてくると、ドアのノックする音が聞こえた。

「？誰だ？」

このオベリスクブルーの寮、異様に設備がいい。

なので玄関にカメラがついているので、そこから外の様子を見た。

「…………女？」

いたのは長い金髪の女。腕を組んでドアをじっと見つめている。

「……………」

ま、追い返す意味もないか。

俺は玄関まで行き、ドアを開いた。

「初めまして・・・かしら？」

するとその女はクールな笑みを浮かべ、

「私の名前は天「ガチャーンッ」・・・ええつー？」

何か言い出す前に俺はドアを閉じた。追い返さない。でも招き入れ  
ない。  
ははは、俺って最高！！

『ちょっとー?一きなり閉めるなんて失礼よー』

ドンドンとドアを叩く音が聞こえる。

おいおい壊れるだろ?が。

「今取り込み中だ、用事なら後にしてくれ」

『え、 そうなの・・・って、 じゃあ先にやつこなさいよ。』

「・・・やつだつたな」

『やつだつたって・・・はあ・・・じゅあまた出直すわ・・・』

諦めたのか、 もうアの向こうにあの女の気配はなくなつた。  
さて、 速いところ終わらせねえとな・・・

俺はまた構築作業に戻つた。

~~~~~

「さあーーーテュエルしようぜーーー。」

「・・・・あれ?」

翌日、なぜか俺はオシリスレッドの奴とデュエルするハメになってしまった。

まあ簡単に説明するとじょう。

ただ作者が描写書くのがだるいってわけじゃないぞ？

授業終わる

変な奴「昨日の凄いやつだな！？」俺とデュエルしようぜ？「は？」

「俺は遊城十代、オシリスレッドで、ここナンバー1だ！！」  
いや自己紹介してんじゃなくて？

とりあえず、デュエルしようぜ！！

あ～れ～？

それで無理矢理会場に連れてこられ、デュエルすることに。

「いきなりデュエルって・・・確か遊城・・・だったか？」

「十代でいい。・・・えっと・・・

ああ、名前言つてなかつた。

「俺はか・・・・・・・・・・

「・・・・・か?」

待て。

待て待て。

考える、もし「」で俺の名が海馬だと言つたら?  
・・・・・うわ、めんべくさいことなじそ~。

遊城・・・・おっと、十代だったな。

十代は俺が名前を言つのを待つていろいろみつかった。

えっと・・・・偽名でいつか。

書類関係は社長にでも任せるとこまじょ。

「か・・・か・・・か、か、『神原 京介』だ」

かんぱい  
かみはら

咄嗟に思いついた名前。まあ、問題ないっしょ。

「京介か！…、よろしくな…。」

「…………」

てめ、せつかく人が考えた名を呼ばねえで性で呼ぶつてどいつよ？

「…………ああ、よろしく。…………それで？『デュエルするのか？』

「むう…、じゃ、いくぜーー。」

「…………ま、デュエルは嫌いじゃない、やつてやるやー。」

カシャーンっと自動で『デュエル』ディスクが展開する。

毎度思つてゐるんだがあれつてどいつう仕組みなんだろつなー。

「『デュエル（ーー）』」

京介 LP4000

十代 LP4000

「先行はおー」「先行はもうひつわー……ドローッ……ええつー。」

先行は言つたもん勝ちだ。

「・・・・・・・・・・・・・・

ふーむ、あまりいい手札じやねえなあ。まあ、これかな。

「手札から、《強欲な壺》を発動、デッキからカードを2枚ドローー

シャシャッと一枚引く。・・・・・・・・普通?

チラツと十代を見ると、アイツは自分の手札を見ながら一ヤニヤしていた。

「いいカードでもきたか?」

俺の質問に十代は隠すことなく満面の笑みで答えた。

「ああ！、京介に対抗できるくらいの、すげえカードがきだぜ  
！」

「わつか

よし、ならばこれだな。

「手札から魔法、《手札抹殺》を発動、効果は・・・言わんでもわかるな？」

「ちよつー？」

これ、俺がよくする戦術という名のズル。

別に答えなくてもいいんだし、今回は十代、お前のミスだぜ。

「そりゃあねえよー・・・

ぶつぶつ文句を言いながら十代は手札を全部捨てた。  
えへっと、ヒツジマンにバブルマン・・スカイグラスパー・・・あ  
つぶね！  
てか《E・HERO》か。ま、十代らしいな。

さて、俺も捨ててドローッと・・・・・うへん、こりゃまた普通かな。

「俺は手札から、『インフルニティ・デーモン』を召喚

ブーンと、ソリットビジュンでモンスターが現れる。  
こいつは墓地にいねえとあんま意味ないしね。

「おお！ かつけえ～～！」

俺のデーモンを見て十代は田を輝かせてくる。  
・・・かっこいい？

「カードセット・・・・・」んなもんか、ターンエンダ

京介 手札 4

場 インフルニティ・デーモン

伏せ1

「おっしゃあ……気を取り直して……俺のターンだ……！」

「ちよ、お前もそのドローの仕方かよつー

「俺は手札から、融合口を発動!!」

「手札のFH・ザーマンとバーストレディを、融合!!…。」

手札融合！？・・・お前、デッキが40枚としても指定の素材と融合が来る確率40分の3だぞ！？  
どんだけ引きいいんだよ・・・。

「いっくせえ京介！！、現れる！！、『E・HEROフレイムウイングマン』！！」

E・HERO フレイムウイングマン

ATK2100

「・・・、うはー！」

これがフレイムウイングマン・・・かつこいい・・・か？

「更に通常召喚で、ここを出すぜーーー。

現れるーーー、『E・HEROスパークマン』ーーー」

E・HEROスパークマン

ATK 1600

「悪いが京介ーーー」のターンで決めさせてもうひざーーー」

え？・・・・あー、フレイムウイングマンでテーモン破壊、300  
くらつてえー、

さらに効果で1800喰らう・・・そして1600のダイレクトか

・・・・・ん？

待てよ？

$300 + 1800 + 1600 = ?$

小学生でもわかる、3700だ。

だから俺がこのラッシュを喰らつても300残るんだが・・・

あ。

・・・『氣づいた？  
俺はもう氣づいたよ。

うん、そうだよ、社長も俺とトコホルしたときよくしてた。  
そう、正解、《融合解除》だね。

・・・・・ってやつ使え！？

「いぐぜ京介！－、バトルだ！－、フレイムウイングマンで、《イ  
ンフルーティーデーモン》を攻撃！－  
フレイム・ショート！－」

やば、本当ならもっと遅く発動する予定だったけど、しゃーねえ！－

「罠、発動！－《テプス・アミコレット》！－

手札を一枚捨て、《フレイムウイングマン》の攻撃を無効にする！－

右手からなにか火炎放射的なものを発射しようとしたら、《フレイム  
ウイングマン》はそのまま何もしなくなる。

「それは・・あの時のカードか！－」

「そりだな、結構便利なんだぜ？これ」

「つべ～～～！…、やるなあ…！…全員の攻撃で終わらせるつもりだったのに…。」

「やつぱり何かするつもりだったのね…・・つてこいつまさか計算間違えたのか？」

・・・・・まさかなあ？

「んじゃ、カード一枚伏せて、ターンエンドだ…！」

「あ、こいつスパークマンで攻撃するの忘れてら。

・・・・黙つとこ』

十代 手札 1

場 フレイムウイングマン

スパークマン

伏せ 1

でもなあ、一ターンでこれほどの展開ってね～。こいつ本当にオシリスレッドか？  
ライエローくらこでも行きそつだが……。

「俺のターン、ドロー」

引いたカードを手札に加え、状況確認。

ふむ・・・俺のデッキであいつの《フレイムウイングマン》に勝てるカードは、  
いまのところ《インフェルーティ・デストロイヤー》のみ。

デプス・アミュレットの効果を使えるのはあと3回・・いや、手札減るしな・・。  
ん――。どうじょ？

・・・守るか。

「・・しゃあないか、俺は《インフェルーティ・ガーディアン》を  
守備表示で召喚！」

ドクロから炎が出てる感じの変なモンスターが出てくる。  
絵柄では赤色の炎なんだが、守備だから今は青い色の炎を出している。

「おおーーまたかっちょいいインフェルノモンスターか！？」

「インフェル《ニティ》だー！」

「たく・・・ってかつこい？・・・ええー。

「カードを2枚セット・・・このままターンエンド

デーモンでアタックしてもよかつたんだが、あの伏せ、何かあると  
思う。

ここは慎重に、コンボが揃うまでだ。

京介 手札 2

場 インフェル《ティ》・デーモン

インフェル《ティ》・ガーディアン

伏せ 2

デプス・アミュレット

「もつと攻めてこよづぜーー、俺のターンーー！」

・・・できねえんだよ。

「もつと攻めるぜー！俺は手札から、《O・オーバーソウル》を発動！！

墓地に存在する、《E・HEROフェザーマン》を、特殊召喚！…」

緑色の鳥みたいなモンスターが現れる。いや、人の形してるけど。

「さりに装備魔法、《スパークガン》を、スパークマンに装備！…」

ソーコムのような銃が、スパークマンの手に収まる。

「《スパークガン》の効果を発動！…自分のターンに、3回まで表側モンスターの表示形式を変更できる！…」

俺は《インフェルニティ・デーモン》の表示形式を守備に変更！…」

「くそ・・・・・」

スパークマンによつてデーモンは雷の走る弾丸を受け、腕をクロスさせて守備の体勢をとつた。

デーモンの守備力は1200・・・まあいいな。

「もういっちょ！… 続けて《インフェルニティ・ガーディアン》を攻撃表示に変更！…」

ガーディアンの炎が絵柄と同じく紅く燃え始める。

おいおい・・・ガーディアンの攻撃力は1200だし・・・。こりやまずいぞ？

「そしてリバースカードオープン！… 《魂の結束・ソウル・ユニオン》！…」

さらばここでトラップかよつ・・・ツ！… 容赦ないな！

「このターン、攻撃表示のモンスターの1体の攻撃力は自分の墓地から選択した「E・HERO」と名のつくモンスター1体の攻撃力分アップする！…」

「なに！？」

もしあの時テーマモンで攻撃していたら・・・俺は大ダメージを負つていたな。

「俺は墓地の、『E・HEROエッジマン』を選択！－、フェザー  
マンの攻撃力を、2600ポイントアップする！－！」

フュザーマン

ATK1100 ATK3700

「3700...」

「よし、バトルだ！！。

「まずはスパークマンで、『インファルーティ・ティ・ゼン』を攻撃！」

「く・・デブス・アミコレットの効果を発動つ・・・！」  
手札を一枚捨てて無効にする・・」

「それは予想済みだぜ！－！続けてフレイムウイングマンで攻撃だ！」

「デブス・アミコレットの効果を発動・・・つ。

攻撃を無効・・・！」

これで俺の手札は〇・・・デプス・アミコレットの効果はもう使えない。

「へへえん・・・もうその罫は使えないよなー！」

それじゃ、『E・HEROフェザーマン』で、『インフェルーティ・ガーディアン』を攻撃だー！」

ダメージを重視して狙ってきたか、だがそれがミスだ十代ー！

「フェザーブレイクーー！」

翼からいくつもの羽をガーディアンに飛ばす。だがその羽はガーディアンに刺さるも、ガーディアンは倒れなかつた。

「なに・・?・・どうして破壊されないんだ?」

当然さ、今の俺の手札は「〇」なんだからな。

「十代、忘れないか?俺のデッキは、手札が〇の時に真の力を發揮するんだぜ?」

「あつ……そ、それじゃあ……」

「ああ、『インフルーティ・ガーディアン』の効果、  
それは手札が0枚の時、このカードは戦闘では破壊されず、カード  
の効果でも破壊されないのぞ……」

な、なんだつて一つ……??

「え？」

外部から声が聞こえた。

つていつのまにか人が多くなってる。中には昨日俺の部屋にきた金  
髪の女もいた。

「く……さつすがは京介……そんな強力なカードを持つているな  
んてな。

だがダメージは受けてもうづぜーーいつけえーフェザーマンーー！」

「くつ……」

フェザーマンの羽が俺にも刺さる。

痛くはないが怖い。よつて怖い。マジ怖い。

「俺はターンエンディングの瞬間、フェザーマンの攻撃力は元の数値に戻る」

十代 手札 0

場 フレイムウイングマン

スパークマン 《スパークガン》 装備

フェザーマン ATK3700 1100

「おもしろなあ、十代・・・俺のターンだ

おもしろい、おもしろいさーー！  
さて俺もそろそろ攻めるぜえーー！」

「ドロー・・・・・・・・へへっ

「こんな土壇場でこのカードを引くなんてな、俺は運がいいかもなー！」

「その表情だと、すっげえカード引いたんだろつまーー！」

「ああ、この場を逆転させることのできるカードだぜ！」

「うおおおおーーおもしねーー速くみせてくれよーー！」

「お前のロンボをさあーー！」

「ロンボじゃねえけど、逆転はできるぜ。」

「あいこーぞーー！」

「俺はカードを一枚伏せ、そしてリバースカードオープンーー！」

『ZERO-MAX』ーーー！

一度伏せたのは無駄じゃない。

このカードは発動時にこのカード自身が一枚と認識されるため一度伏せる意味があるので。

「『ZERO-MAX』ーーおお、なんだーーそのカードの効果は

！？「

焦んなよ、今言つからな。

「このカードは、自分の手札が〇枚の場合、自分の墓地に存在する「インフェルニティ」と名のついた選択したモンスターを特殊召喚し、

特殊召喚したモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ、  
フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊すること  
ができる…！」

「な、なに！？・・・でも京介の墓地にモンスターなんかい  
なかつ・・・ああ！？」

「そう、『デプス・アミュレット』の効果で墓地に送っていたカ  
ード…・

それはな・・・こいつだ！…」

デュエルディスクの墓地からモンスターカードを一枚取り出し、十  
代に見せた。

「イ、『インフェルニティ・デストロイヤー』…・つ！…そのカ  
ードはあの時の…！」

「ふふん・・・」

本来ならば普通に召喚したかつたんだが・・・十代の予想外の強さで捨てることとなつてしまつた。だが今回はそれが逆によかつた。

「『ZERO-MAX』の効果によつて、墓地から現れる！－！『インフェルニティ・デストロイヤー』！－！」

「うおおお・・・・すっげえ！－！」

禍々しい姿でデストロイヤーが現れた。なかなかいい展開で出るやつだな。

「さらに『ZERO-MAX』の効果によつて、特殊召喚したモンスターの攻撃力以下のモンスターを破壊する－！『インフェルニティ・デストロイヤー』の攻撃力は2300・・・よつてお前の場のモンスターを全て破壊する－！」

フレイムウイングマン、スパークマン、フェザーマンは塵となつて消えた。

・・・ちなみに俺の場のデーモンも。

「ああ！！みんな！！！！ってなんで京介のモンスターまで破壊されたんだ？」

「・・・『ZERO-MAX』の効果はフィールド全体に効果を及ぼすんだよ。よつて俺の『インフェルニティ・デーモン』は破壊されるが、

『インフェルニティ・ガーディアン』は自身の効果によつて破壊されない」

「そ、そつか！・・・おつもしれ！」

「デーモン・・・可哀想な子。

「・・・俺もおもしろいぜ！」

やっぱ強い奴と戦うのはおもしろい。

『デュエルアカデミア』・・・行つてよかつたかもな！！

「『ZERO-MAX』を発動したターン、バトルフェイズを行うことはできない・・・。

『インフェルニティ・ガーディアン』を守備表示に変更し、ターンエンドだ！！」

京介 手札 0

場 インフェルニティ・デストロイヤー

インフェルニティ・ガーディアン

伏せ 2

デプス・アミュレット

「危なかつた・・・もしあのまんま攻撃を喰らってたら大ダメージをもらうところだつたぜ・・・」

「まあな。でも今お前の場には何もない、そして手札も0。この場からお前はどう切り抜けるんだ?」

「普通に見れば圧倒的に俺が有利だが・・・こいつのことだ、何かしてくるに違いない。」

「わからんねえな!!・・・でも京介と同じく、俺もこのドローにかけるぜ!!」

さつきとまつたく逆な状況だな。。。

「・・・京介、お前すげーよ」

「・・・は？」

いきなり十代が語り出しだす。あ、心理フェイズですね。

「俺、今まで出会つてきた中で京介みたいなつええやつと出会つたの二郎刃かレバ」

!

・  
・  
・  
・  
・  
ふうん?

「だから俺も、全身全靈をかけて京介の相手をするぜーー！」

そう言って十代はテッキに手を添える。サレンダーではなく、ドローラの姿勢だ。

見せてみろよ十代、お前の本氣をやーー。

どんな戦術かは知らないが・・・俺のこの伏せ一枚がそれをうち碎いて見せる！

## 第一話 テュエルッ！『E・HERO』使い（後書き）

5Dsの遊星は「スターダスト・ドリーム」を拾つたって言つてしま  
したね。

ならちよことオリ設定でこんな感じにしました。

## 第三話 運命のプローシー（前編）

そして、まずはあやまひせていただきます。

今回、都合の悪い展開によって一枚のカードの効果を少し変更してしまいました。

それと、都合の悪いオーリカも出されかねて頂きました。

オーリカ嫌いの方もいらっしゃるでしょうから、不愉快に感じましたらすみません。

12月 23日 デュエルの矛盾を修正しました。

## 第三話 運命のドローッ！

「ドローッ……………」

「……………」

十代はドローした体勢のまま止まり、そしてゆっくりとそのカードを見て、ニヤリと笑つた。

「…………手札から『天よりの宝札』を発動！！  
互いのプレイヤーは、手札が6枚になるよう、カードをドローする  
ぜつ……」

まじかよつ……」の場でそのカードを引くか――

「…………すげえ引きの良さだなあ…………ドローッと」

6枚ドローって、インフルーティにそのカードはメタだぜ……

「よしつ・・・！いくぜ京介！！。

手札から、《フュージョンリカバー融合回収》を発動！！墓地の《融合》と、《E・HEROスパークマン》を手札に加える…」

また融合かつ

「そして手札の《E・HEROクレイマン》と《E・HEROスパークマン》を融合…！」

現れる…！《E・HEROサンダーディファイアント》…！」

E・HEROサンダーディファイアント

ATK 2400

バチバチ稻妻を立てながら、電気を身に纏つた巨人が現れた。

「攻撃力2400・・・俺の《インフェルニティ・デストロイヤー》の2300を越えてきたか…！」

俺の場にはまだ《デプス・アミュレット》がある。これで今のところ6回の攻撃を防ぐことができるな。

だが十代は俺の発言を聞いて笑っていた。

・・・なんだ？

「へへっ、誰も攻撃してモンスターを破壊するなんて言つてねえぜ？」

「む・・・？」

「いぐぜ！『E・HEROサンダージャイアント』の効果を発動！  
このカードが召喚された時、このカードの攻撃力以下のモンスターを一体、破壊する！」

「なに・・・・つー？」

「さつきのお返しだぜ、俺は京介の場の『インフェルニティ・デストロイヤー』を選択！  
くらえ！…、ヴェイパー・スパークツ！…」

「ちー・・・・！」

『デストロイヤー』は空からの雷に打たれ、爆発した。  
・・・・・さて、少しやばいな。

「まだ終わらないぜ？、俺は《サイクロン》を発動！－！  
《デブス・アミュレット》も破壊するぜ！－！」

おまつ

「容赦ねえなあ！－！、十代！－！」

「おっもしれ～からな！－！」

答えになつてねえよ！－！」

「でも、これでもう攻撃は無効かできないだろ？  
最後だ！－！、手札から、《H・ヒートハート》を発動！－！  
サンダージャイアントに装備！－！」

サンダージャイアント

ATK2400 2900

「2900···だが《インフルニティ・ガーディアン》は守  
備表示だ。

俺のライフを削ることはできんぞ！

「違うなっ、『H・ヒートハート』のもつ一つの効果！、それは守備表示モンスターを攻撃したとき、その越えた数値分、相手に貫通ダメージを『える！』

げげっ！！

ガーディアンの守備力は1700だ、2900からの貫通喰らったダメージは1200・・・

俺のライフは残り1500、余るのは300・・・ツー！

「さらに京介、お前の『インフェルニティ・ガーディアン』は手札が0枚の時しか

その効果は発動しないんだよな？

ならこのまま破壊させてもらひぜ！バトルだ！！」

くつそつ！今発動させるべきか否か

「サンダージャイアントで『インフェルニティ・ガーディアン』を

攻撃！！

ボルティック・サンダー！！！」

・・・・いや、ここでやるべき！！！

「ぐつ 騰発動！！！ 『全弾発射』！！！

手札を全て墓地へ送り、

墓地に送ったガーネの枚数×200ポイントタブーを相手「ライ」に与える！！」

「何！うわあああッ！」

十代 LP4000 2800

「《全弾発射》の効果で俺の手札は再び〇・・・よつて《インフェルニティ・ガーディアン》は戦闘では破壊されない！！」

ガーディアンを貫通して俺にも雷が走る。

京介 L P 1500  
300

「やっぱそう簡単にはやられねえよなあ！！」俺はターンエンドだ

「……」

十代 手札 2枚

場 『E・HEROサンダージャイアント』

「まつた逆転されちまつたなあ・・・まいつたねこつや

「いじなこらんな出来事があるから、トヨエルは面白このせりへーー。

そんな満面の笑みをするな・・・なんか萎えるぜ。

「俺のターン・・・・ドローッ」

引いたカードは・・・・・なんちゅう運カードだよーー。

「俺は手札より、『インフルニティ・リローダー』を守備表示で  
特殊召喚!!」

銃口を前後に合わせたようなモンスターが俺の場に現れた。

「今度はどんな効果なんだッ！？」

「《インフルーティ・リローダー》の効果、それは自分の手札が0枚の場合にこのカードをドローした場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚することができます。さらに1ターンに一度、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができ、この効果でドローしたカードをお互いに確認。モンスターカードだつた場合、そのモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与える……」

「かけのカードか！…、おつもしけえ！…」

いい効果だけじゃあないんだがな。

「ただし……それが魔法、罷だつた場合、俺は500ポイントのダメージを受ける……」

「な、それじゃあ、もし魔法が罷を引いたら……ッ」

ああ、やつや。

「俺は500のダメージを受ける……よって俺の負けだな

俺はデッキの上に指を添える。

「これがモンスターか魔法か罷か……確率は3分の1?  
……違うな、当たるかはずれるかの一分の一だッ！――！」

俺は信じるわ……社長が俺のために作り、そして俺が初めて心を  
込めたデッキだ。

「さあ行くぜ？…………ドローリング――――――」

ちゅうこと格好つけてローラーしてみた。

「…………」

正直見るのが怖い……だが負けんぞ……。

「……『クッ』

十代も気になるのか息を飲んでいる

「…………」

引いたカードをゆっくり裏返し、横田でそのカードを見た。

「…………ど、どうだつたんだ？」

「…………。」

「…………ふ」

さつすが…………だな。

俺は引いたカードを人差し指と中指で挟んだまま、そのカードを十代に見せた。

「俺の引いたカード……それは『インフェルニティ・デストロイ  
ヤー』!!!!」

「うおおおおおおおおおッ!!!!すづヶえ!!!!」

「神引きとはこのことだ！！！」

「か十代も喜ぶなよ！！！俺は敵だッ！！！」

「『デストロイマー』のレベルは6ツ・・・よつて1200ポイントのダメージだ！！」

「くつ・・・・ツ」

十代の方角のリローダーの銃口がカチリッと音がなり、そこから弾が発射されて十代を貫いた。

十代 LP2800 1600

「そして俺の場の『インフェルニティ・ガーディアン』を生け贋に・・・

引いた『インフェルニティ・デストロイマー』を召喚ッ！！！」

再び『デストロイマー』。過労死すんなよ？

「やるなあ・・・でもそのモンスターじゃあ、俺のサンダージャイアントを倒すことは出来ないぜ！！！」

「甘いツ……わざのお返しのお返しだツ……リバースカードオーブンツ……」

ずっと伏せていたカード……のときのために取っていたのセツ!!

「『インフルーティ・プレッシャー』!!  
自分の手札が0の時、このカードが場に存在するかぎり自分の場の  
『インフルーティ』と名の付いたモンスターは  
戦闘では破壊されないツ……。

さらに、自分の場の『インフルーティ』と名の付いたモンスター  
の数だけ相手フィールド上のモンスターの攻撃力は100ポイント  
ダウントするツ……!!

ただし、このカードが存在するかぎり、自分は相手に戦闘ダメージ  
を与えることはできないツ……!!

サンダージャイアント

ATK2400 2200

「サンダージャイアントの攻撃力が2200……京介のモンスター  
に負けた!?」

「いくぜ、バトルだッ！！『インフェルニティ・デストロイヤー』の攻撃！！

『デストロイスラッシュユッ！！』

十代のサンダージャイアントは雷を出し抵抗していたものの、最後には、デストロイヤーによって切り裂かれた。

十代 LP1600 1500

「く・・・・だが、このターン、俺は持ちこたえたぜっ！！！」

京介の場合はそのモンスターだけ、次の俺のターンで決めてみせるぜ

！！

「残念、これで終わりだ」

「何？・・・だ、だつてそのカードの効果で俺は戦闘ダメージは喰らわないはずじゃあ・・・」

「戦闘ダメージは確かに『えられない・・・だが効果ダメージは』えられる！・・・」

「効果ダメージ？…………ああッ！…………そりが……」

「思い出したが、『インフルーティ・デストロイヤー』の効果。それは相手モンスターを破壊した場合、相手に1600ポイントのダメージを与える……！」

「ま、まじかよ…………」

自分でさもびっくりだ、ここまで上手くいくなんてな。

「俺の勝ちだぜ十代、行け！『インフルーティ・デストロイヤー』

『！－！』

「うわあああああああああああッ！－！－！」

デストロイヤーが十代の前にジャンプし、そのまま十代を切り裂いた。

十代 LP1500 0



## 第三話 運命のドローラー（後書き）

インフレーティ無双。

ただ作者は植物ライロを使用しています。

## 第四話 テュエルの新たな可能性、シンクロ召喚ー（前書き）

さてさて、題名のとおり、なんとシンクロの登場です。

作者は日常描写が苦手なので、無理矢理テュエルにさせています  
追記・鈴虫様の指摘により、テュエルに間違いがありましたので修正しました。

## 第四話 テュエルの新たな可能性、シンクロ召喚！

「・・・すつげえ！・・・すつげえよ京介ッ！・・・」このテュエル、めちゃくちゃ燃えたぜッ！！

「ああ、俺も楽しかった」

テュエルが俺の勝利で終わり、今は十代と話をしていた。  
しかしぎりぎりだった・・・俺のプレイミスもそうだが、もしあの引きがなかつたら俺が負けていたろうな。

「兄貴の言つとおり、すげいテュエルだつたつすよ二人ともー！」

「そりゃどーも」

俺の隣にいるこの青髪のチビ眼鏡は丸藤翔。

さつき自己紹介されたが、どうやら十代を兄貴と慕つてゐるようだ。  
そんな翔も制服の色は赤、つまりオシリスレッドだ。

「そういう大丈夫なのか？」

「ん? 何がだ?」

「俺達勝手にいい使ひ方をなじむ、許可とかこりぬけの?」

「…………」

「…………ん?」

え、何この沈黙。

お、一十代、なぜ冷汗を垂らしている。

「お、こ黙るなよ……え、まさか?」

「はは……またせひもつた……たひもつた……」

「無断でこの場所を使いつと停学……と轉へて退学つてといひかじり

「まは~」

突然後ろから声がし、振り返るとそこにはあの女がいた。

「あんたはあの時の……」

「げつ、明日香……」

明日香と呼ばれた女は俺と十代を交互に見た後、深いため息をついた。

「十代……あんた前のことがまったく懲りてないのね？」

「いや、一京介のデュアルを思い出したら無償にしたくなつてさー」

この前? 十代は前にもこいつを無断使用したのか?

「いい加減にしなさい……前回は許したけれど、今回はもう黙田よ」

「や、そんなあ~~~~ツ」

「ちょっとといいか？話がまったく読めんのだが？」

「あなたもあなたよ」

「え？」

やべ、俺に矛先向いたなこりや。

「無断でテュエル場を使用してはならないって、入学時にもらった  
しおりに書いてあつたはずよ。

十代に誘われたとはい、あなたも『知らなかつた』じゃすまされ  
ないわ」

「えーっ」

まずいかなー。いくら俺が社長の推薦だからって校則に引っかかつ  
たら言い訳聞かないしな。

しかも社長はそんな所を気にする人。テスト『テュエリスト』としては  
まずい事態だ。

「ちょっと待てよ明日香つ！、京介は俺が無理矢理連れてこらした  
んだ、悪いのは全部俺だ！  
京介に罪はない！」

十代

確かにそうなのだが、それに乗つたのは俺だ。

「…………やつねえ、私の話のことを一つ、聞いてくれたら  
ら、ここの事は黙つてあげましょう  
もがねん、ここの人にいるみんなにもね」

そう言って周りを見渡す。  
頷いてるあたり、ここにいる奴らは」の『明日香』を慕つていろいろ  
しい。

「おへ、聞く聞く……どんな願いだつて聞いてやるが……」

「私の願い、それはデュエルよ」

左手を上げ、デュエルディスクを見せてくる。  
てかデュエルかよ？

「ああ、悪いけど、戦うのは十代じゃないわ」

「ええつ？俺じゃねえの？」

「・・・・・・・・・・・・

まさか・・・・・な？

「私が戦いたいのは、もちろんあなたよーー！」

ビシッと俺に指を指してきた。人に指を指したらいけません。

「きょ、京介ど？」

「俺ど？」

「ええ、『インフィニティ』だったかしら？」

あんな特殊なデッキを使うあなたに興味があるの

「のめ」

「インフ『HURL』トイ』だつ」

「あら」「めぐなせこ、悪かったわね」

「こいつ・・・挑発してやがるな?」

昨日俺があしらつたことに怒つてんのか?」

「それドビツクの?もし私に勝てたら、今回の事も黙つておこしてあげるわ」

「・・・・・・・・・・・・」

迷つ必要はなこつと。

~~~~~

「やつじえぱ自己紹介がまだだつたわね、私は『天上院明日香』、あなたと回じオベリスクブルーよ」

「かい・・・神原京介だ」

「そう、神原君ね、まず、私の挑戦を受けてくれたことに感謝するわ」

挑発しておいて何言つてんだか。  
まあ乗つたのも俺だがね。

「亮もあなたに興味を持っていたわ・・・いい勝負ができれりつね」

亮?

「さあ行くわよ、デュエルッ！――！」

「約束は守れよっ、デュエル」

京介 LP4000

明日香 LP4000

ペガサスはどんな理由でこんなモンスターを考えたんだろうって感じのモンスターが現れた。いい趣味だ。

ATK1000

「私は手札から『サイバー・チュチュ』を攻撃表示で召喚つ！」

女のデュエリスト・・・悔れないな。  
ここは慎重にっと。

「先行はもううわ、私のターン、ドローッ！！」

応援ありがとう。

「京介ーツ、がんばれよーっ！ー！」

「神原さん頑張つてくださいーいっ！」

「カードを2枚セットして、ターンエンドよ！」

明日香  
手札  
3枚

## 場 サイバー・チュチュ

伏せ 2

「俺のターン、ドロー」

まだどんなデツキかは解らないか・・・。  
少なくともあいつは今までの俺のデュエルを見ているはず。  
俺が不利だな。

• • • • • • • • • • • • • • • •

さて、どうする？まずは様子見で守るか？それとも攻めるか？攻めるなら「テーモン」、守るならガーディアンってところか。

「・・・・・俺は《インフェルニティ・デーモン》を攻撃表示で召喚つ」

攻めに決めた。

「バトルだつ！、《インフェルニティ・デーモン》で、サイバー・チュチュ・・・・  
《サイバー・チュチュ》を攻撃！！」

「噛んだな」

「噛んだつすね」

「うるせえおまいら！」

「罠カード発動！、《ドゥーブルパッセ》！－、相手モンスターの攻撃を直接攻撃に変更させ、さらに攻撃対象となつたモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるわつ－！」

デーモンは天上院のモンスターを通過し、ダイレクトに攻撃を喰らわそとする

「さりに罠発動！！、《ホーリーライフバリアー》！－！このターン、私に来るダメージを全て0にする－－！」

ピタッとデーモンは寸前で攻撃をやめ、もとの場所に戻った。

「《ドゥーブルパッセ》の効果により、行きなさい－－！、《サイバー・チュチュ》！－！」

「おうッ」

体当たり・・・・なのか？そんな感じの衝撃を受けた気がした。

・・・ソリットビジョンでもこええ・・。

京介 LP4000 3000

「ち・・・・カードを4枚セットし、ターンエンドだ」

京介 手札 1枚

場 インフェルニティ・デーモン

「どうやらモンスターが手札に来ていたようね、手札を〇枚に仕切  
れてない」

「運悪かつたんだよ」

「どうかしらね・・・私のターン！！」

運が悪いといつのは嘘、実際はすくじくよかつたりする

「手札から、《ブレード・スケーター》を召喚！！」

んー。

「さりに、速攻魔法、《アレグロ・トゥール》！！  
自分がモンスターを召喚したとき、相手の魔法、罠カードを一枚破  
壊することができるわ！－！」

んんッ！？

「私は・・・・・右から一番目のカードを選択する！！」

ブレード・スケーターが回転しながら俺の伏せを破壊した。

「《聖なるバリア ミラーフォース》・・・危なかつたわね」

俺の伏せは残り三枚。まだまだ余裕だ。

「カード一枚セットして、ターンエンドよーー！」

明日香 手札 1

場 サイバー・チュチュ

ブレード・スケーター

伏せ 1

さつきから攻撃力の低いモンスターしか出さないな・・・

「ドロー前に、俺は罠を発動！！《サンダー・ブレイク》！！手札を一枚捨て、相手フィールド上のカードを一枚破壊する！！」

破壊するのは・・・伏せだ！！

「俺はその伏せカードを破壊！！」

「つ・・・やるわね」

手札を一枚墓地に送つて、天上院の伏せを破壊した。  
因みにカードは《激流葬》だった。

・・・激流葬？

「・・・そして俺のターン、ドロー」

モンスターはあいつのほうが出でているはず・・・なのになぜ《激流葬》を？  
なにがあるのか？

「俺が引いたカードは《インフェルーティ・リローダー》！自身の効果により、守備表示で特殊召喚する！」

「引いたカードの種類によつて効果を変えるモンスターね」

もう検証済みつてやつか？

「《インフルニティ・リローダー》の効果を発動！、デッキからカードをドローー！！」

引いたカードは・・・ゲツ、魔法！！

「・・・俺が引いたのは魔法カード、よつて俺は500ポイントのダメージを受ける・・・」

銃口がこちらを向き、弾が俺を撃ち向いた。

「くそあ・・・」

京介 LP 3000 2500

だが引いたこのカードはいい。

「俺は引いた《インフェルニティ・インフィニティ》を発動！  
デッキからレベル2以下の《インフェルニティ》と名の付いたモンスターを、手札に加える！」

「あら、そのままでの元気の戻ればば！」にこったのかじらへ。

「む」

俺はデッキからカードを手札に加えた。

「うるせえっ、ええい、バトルだ！！！、《インフェルニティ・モン》で、《サイバー・チュチュ》  
に攻撃！…、ヘル・フレッシャー！…」

空間より出た炎の腕によつて、《サイバー・チュチュ》は押しつぶされた。

「・・・つ・・ふふ、面白いわつ」

明日香 LP4000 3200

「モンスターをセット、ターンエンド！、やつやといこ…」

京介 手札0

場 インフェルニティ・デーモン

インフェルニティ・リローダー

モンスター裏側守備

伏せ 2

「言わねなくてもいくわッ！、私のターン、ドローーーー！」

俺の場には攻撃力1800のモンスター・・・  
そして2枚の伏せは《炸裂装甲》と《奈落の落とし穴》、攻撃にも  
対応、召喚にも対応、準備は万全だ。

「・・・・ふふ、神原君、見せてあげるわ、美しき私のモンスター  
一達を！！

私は手札から《融合》を発動！！、場の《ブレード・スケーター》  
と手札の《エトワール・サイバー》を融合！！

お前も融合か！！

「現れなさい！、『サイバー・ブレイダー』！！」

サイバー・ブレイダー ATK2100

長い髪で・・・これまた・・・ふつくしい・・・。  
つと、見とれている場合じやねえか！

「甘いぜ、罠発動！！『奈落の落とし穴』！」

攻撃力1500以上のモンスターが特殊召喚されたとき、そのモンスターをゲームから除外する！..」

地面が裂け、そこに『サイバー・ブレイダー』が落ちて・・・いかない！？

なんと『サイバー・ブレイダー』はその場でジャンプし、奈落から避けた。

「え、な、なぜだ？」

「ふふ、甘いのは貴方ね。  
『サイバー・ブレイダー』の効果、それは相手のモンスターの数によつて効果を得るのよ！」

「むつ！？」

「相手モンスターが3体の時、相手の魔法・罠・モンスター効果を全て無効にする効果を得る！」

Pas De Quat're！」

「なつ・・・！」

効果を全て無効・・・だと？

なら《炸裂装甲》も意味がないっ！！

「まあ行くわよ！－、《サイバーブレイダー》で、《インフェルニティ・デーモン》を攻撃！－  
グリッサード・スラッシュユ！－」

「ちいつ・・・！」

スケートの足についている刃で、デーモンはあっけなく破壊されてしまった。

「『サイバー・ブレイダー』の2つ目の効果を発動！  
相手モンスターが2体になつたため、このカードの攻撃力を倍にする！」

Pass De Trois！」

サイバー・ブレイダー

ATK2100 4200

「攻撃力4200……一撃でもくらつたら即死だな」

場から天上院に田を向けると、あいつはニヤリと笑った。

「……どうしたのかしら？あなたの力はこんなものじゃないはずよ？」

私に見せてちようだい、あなたの本気をつ。

「ターンエンド！」

明日香 手札 0

場 サイバー・ブレイダー

伏せ 1

「…………」

俺の場にはリローダーと裏のモンスターのみ……。  
そして相手の場には攻撃力4200のモンスター。

もし俺がモンスターをまた出せば今度は魔法、罠、効果を受けなく  
なってしまう。

だが今の俺の場には奴の攻撃力を越えるモンスターはない……。  
どうする？

・・・・デストロイヤーを引くしかない……か

「俺の……ターンッ……！」

来い！！！

「……よしー！」

引いたカードは《インフェルニティ・デストロイヤー》！

お前最高！！

だが《サイバーブレイダー》はモンスターが一体の時は戦闘では破  
壊されない、

よつて『デストロイヤー』の効果は発動できない……ならば……

「俺は伏せモンスターを表にする!、  
現れる!『インフルーティ・ビードル』!」

インフルーティ・ビードル

ATK 1200

「つ！・・・また新たなインフルーティ?」

「場の『インフルーティ・リローダー』を生け贋に、現れる、『  
インフルーティ・デストロイヤー』!!

インフルーティ・デストロイヤー

ATK 2300

「出たわね・・・でもそのモンスターでもつてしまふ、私の『サイ  
バー・ブレイダー』には敵わないわよ!・!」

敵わなくていいのさ・・・本番はここからだ!・!・!

「《インフルーティ・ビードル》の効果を発動！！  
手札が0枚の時このカードをリリースすることによって、デッキから同名のカードを2枚、場に特殊召喚する！！」

「……なんですって！？」

「俺はビードルをリリース！、新たなビードルを2体、場に特殊召喚！！」

カブトムシが場に2体・・・いや、2匹現れた。

「これで俺の場のモンスターは三体、《サイバー・ブレイダー》の攻撃力は元に戻る！」

「ふうん？・・・」

サイバー・ブレイダー

ATK4200 2100

（なんだ？・・・あの予想していたかのような表情は？）

「残念ね、それは譲れないわ！、罷カード発動！『サイバー・スケーター』！！」

「！」（）

「そうよ、『サイバー・スケーター』の効果……それは自分の場の『サイバー』と名の付いたモンスターの数だけ、その選択したモンスターの攻撃力以下の相手モンスターを破壊することができる！！！」

「なにッ！？」

「私が選択するのはもちろん『サイバー・ブレイダー』よ。よつて攻撃力2100以下……『インフェルーティ・ビードル』を一體破壊するわ！！！」

「く……！」

一体のビードルが爆発した。

これで俺の場はまた2体になってしまった。

「さらに、この効果でモンスターが破壊された時、相手フィールド上の魔法、罠を一枚破壊する」

追い打ちをかけんなよ・・・・！

唯一の希望であつた『破裂装甲』も破壊されてしまった。

「そして相手モンスターの数が2体になつたため、《サイバー・ブレイダー》の2つ目の効果が発動！

**Pas De Trois!**

サイバー・ブレイダー

ATK2100  
4200

「どうかしら？私のモンスター達は？」

• • • • •

「・・・正直・・・」リリサはやる気も思ってなかつたけど、なかなかの強さね。

でも亮が並つ狂の強さでもなかつたわ

「いいで俺は負けるのか？」

「でもいいテュエルだったわ・・・約束はテュエルをすることが  
けだつたから、今回の事は黙っていてあげる」

いやだね。

「か、神原君？」

「まだまだ・・・」(なんどじやあ満足できねえッ！)

「え？」

「まだだ・・・・・

(テストロイヤーのレベルは6・・・そしてビーダルは2・・・・)

考えてみろよ・・・俺にはあつたじやねえか。  
俺の場にはテストロイヤーとビーダルだけ・・・。  
2体だから攻撃力は倍になる・・・。  
ならばまた一体にすればいいだけのこと。

「お前に見せてやるよ・・・・・デュエルの新たな可能性をな・・・

社長さんよ・・・・・使わせてもうひげーーー！」

「何を言つているの・・・・?

あなたの手札は0、伏せカードもない、場には私の《サイバー・ブレイダー》を越える攻撃力をもつモンスターはない・・・この状況でどう私は勝とどうの？」

できるんだな、これがな！

「いくぞーーー、俺はレベル6、《インフェルニティ・デストロイヤー》に、  
レベル2、《インフェルニティ・ビードル》をチューニングーーー！」

「チューニングッ・・・・ですってーーー？」

「チューナー」なのだからチューニング・・・・いいよな？  
だから社長さん、あんたから譲り受けたこのカード、出すせてもらひ  
うぜーーー！」

ビードルは2つの縁の輪となり、デストロイヤーを囲む

「大いなる風に、導かれた翼を見よ。」

やがて囲んでいた輪が光に包まれる

「シンクロ召喚……！」

これが『シンクロ』……満足できるな……。

「響け、《スターダスト・ドリーン》…………！」

星のような粒子をぱらまきながら、美しさ虹を竜が俺のフィールドに現れた。



## 第四話 テュエルの新たな可能性、シンクロ召喚！（後書き）

オリカを出すのはいいけどぶつこわれたらまずいし……うむ、難しい。

今回は京介が使ったオリカを紹介します。

### 《インフェルニティ・プレッシャー》

#### 永続罠

「自分の手札が0枚の時、このカードが自分フィールド上に存在する場合、フィールド上に存在する《インフェルニティ》と名の付いたモンスターは戦闘では破壊されない。

また、相手フィールド上のモンスターの攻撃力は自分フィールドに存在する《インフェルニティ》と名の付いたモンスターの数×100ポイントダウンする。

このカードがフィールド上に存在する限り、自分は相手に戦闘ダメージを与えることはできない」

### 《インフェルニティ・インフィニティ》

#### 通常魔法

このカードは、自分の手札がこのカード一枚の時しか発動することができない。

デッキからレベル2以下の『インフルーティ』と名の付いたモンスターを手札に加える事ができる。

## 第五講 王族ご（禮書也）

やまつ作者は口掌・・とこいゆつゆばが封主です。

わいかれいひつたりとせり

## 第五話 出会い

「スター・ダスター・・・ドリゴン・・・」

白く、輝く光の粒子を回転しながら飛んでもき散らすの姿。

「・・・・・すげえ・・・」

「すい」こつす・・・

「・・・・きれい」

十代も翔も、敵の天上院さえその美しさに目を奪われているようだ  
った。

スターダストドリゴンは翼で自身を包んだ状態で何度も回転し、そ  
して俺の目の前に来てその翼を開いた。

【-----ツ-----】

星屑の雄叫びがこのデュエル会場に響く。

今の俺達にとってはその雄叫びを美しく聞こえた。

『スターダスト・ドラゴン』

ATK2500

「…………ハツ！－！」

おおつと、見とれている場合じゃないな。

俺は軽く頬を叩き、デュエルに集中し直す。

見ると天上院も正氣を戻したようで、視線をこちらに戻した。

「すごいわね、こんな綺麗なモンスターがいたなんて。  
今まで見たこともなかつたわ。」

「ああ、俺もさ、初めて使って……ん？」

チラフと田でスターダストドラゴンを見た。  
するとスターダスト・ドラゴンは何と俺を見ていた。

【.....】

スターダストドラゴンは何も言つことなく、ただ俺を見ている。  
俺の気のせいかもしれないが、俺を試そうとしている・・・そんな  
目を奴はしていた。

「・・・・？」

訳が分からぬまま、俺はとうあえずトヨエルを再開することにした。

「いくぜ天上院・・・・」

「ふつ・・・来なさい！」

「バトルだ！！、スターダストドラゴンの攻撃・・・・ッ！？」

「・・・え？」

攻撃を宣言しようとしたその瞬間、俺は今までにない眩に襲わ  
れた。

「う…………あ…………く

何だ？この感覚は？

まるで頭を高速で振られたような、頭痛もしてきた。

「…………く

俺はだんだんと気分も悪くなつていき、バタンと最終的に床にひれ伏してしまった。

「…………ッ…………！」

最後に見えたのは自分の方へと駆けつけてくる天上院の姿と

【…………】

静かに俺を見つめたまま、星屑となつて消えていくスターダストドラゴンの姿だった。

~~~~~

遠い記憶・・・それは俺がまだ13歳の時だつた。

その時俺は孤児だつた。親の顔なんて覚えていいるわけがなく、ふらふらと町で食料を探す日々を送つていた。  
やがて俺は施設に送られ、施設官に言われるがまま、ただ体を動かすことだけに没頭していた。

その施設は地獄だつた。

毎日の過酷な労働、貧相な飯・・・それが毎日毎日・・・まさに地獄としか言いようがなかつた。

俺はその時もう人生を諦めていた。もうやることもない、このまま俺は死ぬんだ、と。

この『無限』に続く『地獄』に・・・

だがそんな生活は突如終わりを告げた。

いつものように重労働をしていたところ、一人の男性がこの施設に怒鳴り込んできた。

「・・・貴様達、ここで何をしている」

その男はドアを蹴り破つて早々そんな事を言いだした。  
突然の出来事に俺達子供は呆然とし、施設官は当然の「」とくその男  
に掴みかかった。

「ぐあッ！……」

なんとその男は、持つていた銀のジエラルミンケースで思いつきり  
施設官の頭を殴つた。

あまりにも痛みに頭を抑えて床に転がる施設官を見て、他の施設官  
もその男に殴りかかるうとした。

だが、男が指を鳴らすと、突き破られたドアから黒い服を着て、サ  
ングラスをかけた男達、俗に言つてＳＰが何人も入ってきた。  
いつも簡単に男はこの施設を包囲し、やがてこちらまで歩いてこん  
な事を言つた。

「もう貴様達は自由だ！、誰にも縛られず、誰の言つことでも聞かな  
くて言ひ！！」

「ツー……」

理解した。

この男は俺達を救つてくれたのだと。

それがわかつた瞬間、俺は背を向けて歩き出している男に向かつて

走っていた。

「おー！あんた！！」

「貴様！、何をしてこるーー！」

数人のS.P.に抑えられながらも、俺はその男を呼んだ。  
男は顔をこちらに向けず、足を止めた。

「あんた、俺達を救ってくれたんだろー？・・・ならあんたに礼が  
したい！！」

「・・・・礼なぞいらん、俺は当然の事をしたまでだ」

駄目だ、それでは俺が納得できない。

「待てよーーそれじゃあ・・・それじゃあ俺をあんたの息子にして  
くれーー！」

歩めていた足を止め、その男は初めてこちらを向いた。  
すでにS.P.によって床で抑えられている俺を、その男は見下げる。

「…………俺の息子…………だと？」

「そうだ！！、この恩は必ず返すッ…………のために、俺をあんたの息子・・養子にしてくれ！！  
迷惑はかけない！！」

「…………」

男は何もいわず、ただ俺を見ている。  
く・・・ダメか?  
なにか・・・なにか無いのか?・・・そうだ！！

「なら・・・ならチョスで勝負しないか！？」

俺は向こうにあるチョス盤に手を向ける。

「…………ほりへ。」

「これでも俺はチョスが得意でね・・・もしあんたに勝つたら、俺をあんたの養子にしてくれ。」

負けたら・・・あなたの元でもいい、タダ働きでもなんでもする」

「…………」

男はなにも言わない。

「おい貴様！、せつかく社長が助けてやつたのだ！そのような無礼な行為が許させるわけないだろ？！」

「ぐつ離せよッ！…」

じりじりと、男から俺は離される。

「待て」

「ツー、社長！？」

だが男の一言でヒロは動きを止める。

その隙に俺はヒロの腕を放す。

「…………似ている」

一瞬、男がそんなことを言った。

「え？」

「少年、名は何と云ふ？」

名前を聞かれたので、俺は唯一覚えていた名前を言った。

「京介」

「京介か・・・・良いだろつ、貴様の挑戦、受けて立つ！」

「・・・・ありがとうございます」

そうして俺はその男とチェスの勝負をすることとなつた。

俺達は机に座り、そこにはエヌ盤が置かれる。

そして俺の人生をかけた勝負が始まつた。

• • • • • • • • •

「アッ

「……………」

コトツ

お互い、何も言葉を発さずに着々と駒を動かしていく。

「（強い……）」

俺は自分の認識を改めた。自分は結構チエスは得意だったのだが、まさかここまで強い人がいるとは。

黙々と駒を動かし、時間が過ぎていく。

「……………」

「……………へ」

着々と俺の駒が男に取られていく。どうする……このままでは負ける。

チラッと男の方を見る。男もまた、俺を見ていた。

腕を組み、足をクロスさせた堂々した姿で、俺がどんな事をしようが男は俺の一歩上を読んでいた。

Г ( . . . . ) Г

גָּדוֹלָה מִזְמָרָה

そこで俺は友人の言葉を思い出した。

『実はチエスにもイカサマがあるんだぜ、ビリやるかは秘密だけどな』

『おいおい、勿体ぶらずに教えるよ。ま、といつても俺はそんなん  
しなくとも勝てるがな』

『たいした自身だねえ。まあいいや。教えてあげるよ。まあせーじ』

「ツ！！」

イカサマ……。そうだ、ここをいつすれば……勝つことができる。

しかもししばれたら?・・・。

いや、迷っている暇なんてない・・・。ここはするべき!—

そうして俺は恩人とも言える人に最悪の仇で返した。

~~~~~

「ふうん・・・・・」

「・・・・・・・・」

チエスの番白のナイトの移動先に、黒のキングがある。

「チエックメイト」

黒のキングを取り、白のナイトをその場に置く、  
これで勝負は白の勝ちだ。

「・・・・・・・・・・・・」

取った黒のキングを手のひらで口口口口をかじこむのは

「嘘だろ・・・・・・」

「ふうん・・・・・まだまだのよつだな」

男だった。

そり、俺は負けた。

「なかなかいい腕であつたが、俺様にはまだ敵つまい」

卷之三

まさかイカサマをして負けるなんて思いもよらなかつた・・・。  
この人・・・強すぎる！

「せーらにイカサマまでして俺に勝ちたかつたか？」

「シ！…！…！…！…！」

心臓が止まると思った。この男、俺がイカサマをしたのを気づいて！？

「氣づいていらっしゃったんですね……？」

「無論だ、俺様の目を誤魔化せると思つたか？」

• • • • • • • • • • • •

完敗だ。  
俺は顔を俯く。

「・・・ありがとうございました・・・俺は貴方に負けた。

約束どおり、俺をどこにでも連れていってくれ。売ろうが、タダ働きをさせようが構わない」

俺はどうなるのだろうか？ 海外に売られるのか？

それならまだいいな。だがそんなことももう関係はない。

「・・・・・ふん」

男は席を立ち、部屋から出ていこうとする。手ぶらの状態で。・・・・・手ぶら？

「え・・・ちよ、ちよっと、あのケースは・・？」

見ると椅子の横には男が持っていたジェラルミンケースが置いたままあつた。

忘れていたのだろうか？

「何を言っている、それはお前が持つものだ」

「え・・？」

「まさか、荷物を俺様にわざわざ持たせると云うのか貴様は？」

「・・・・・あ」

それはつまり・・・・・

「俺様の養子になるからには覚悟をしておけ・・・  
それくらいの覚悟はあるのだろ?」

「・・・・・・・・はいッ!――!――!――!――!――!――!――!

この人は・・・・俺を捨ててくれた。

俺は真っ先にジェラルミンケースを持ち、その男の後ろについていった。

（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

「・・・・少しいですか?」

ヘリの中で俺は男に聞いた。

「何用だ」

「あなたの名前・・・教えて下さい」

「ふん」

男はぶつせりゆづて、口ひ答えた。

「地上最強のテューハリスト、

海馬瀬戸だ」

これが、俺と社長との出会いだった。

## 第五話 出会い（後書き）

実際にチェスでイカサマをやることまだできません。

チェス盤は小さいのでどうやるかは謎です。

しゃべりながら囲をめぐらしあげてください。

## 第六話　闇を支配する者（前書き）

明けましておめでとうございます。

お年玉のお陰で財布の中がウハウハになつたへえあです。

わたくして今回もまたまたデュエル。そろそろメリハリつけようかよっ・・。

そして今回はオリカのオンパレードです。

## 第六話 聞を支配する者

「……」

目の前に広がる白い空間。少なくとも俺の記憶ではこんな場所は知らない。

なぜ俺はこんなところにいるのだろう。俺は確か天上院とデュエルをしていたはずでは？

「気が付いたか？」

今の状況に混乱していた時、後ろから声がかかった。  
すぐに後ろを向くと、そこにいたのは、

「ツー俺……？」

そう、そこにいたのは俺と瓜二つの人物であった。

身長も、髪も、全て同じであった。ただ、前髪に隠れているためか目はよく見えない。

「 よつやくお目覚めつてか、俺様の表の人格さんよ?」

俺の声はこんな質なのか…自分からはわからなかつた。

「 ……貴様は一体何者だ?なぜ俺と同じ顔なんだ?」「なぜだ?」

「質問は一つずつにしろよ…まず、そうだな…」「がどうなのかを教えてやう。」

「は俺達…いや、お前の中だ」

「俺の、中?」

「人格つづーたらいいのかね?」「はお前という存在の中身なんだよ」

訳がわからない。これが俺の中だとしても、なぜ俺の中に俺がいるのだろう。

「ああ、心配しなくていいぜ?」「お前は意識だけの存在だ。  
現実のお前は今ベッドでなんねしてるぜ」

俺の考えていることがわかるのか?

「…………」

「もう睨むなって。さて、次の質問、俺様が何者か…だったな？  
そうだな、簡単に答えると」

「俺と同じ顔をした」—は、一息間をいれで、言った。

「俺様はお前の裏だ」

裏？

「…………なんだ？俺の裏？それは一体……」

「おおつと、悪いが話せるのはここまでだ。後は自分で考えること  
たな。

俺様から話すことにはもうねえよ」

そう言つて奴は歩き出した。  
んなことできるか。

「待て。やつ易々と逃がすとでも思つてこるのか？」

デュエルティスクを展開し、ホルスターからトックを出して差し込む。

「お？ お前お得意のデュエルってか？」

「…………受けのか、受けないのか？」

「へへ、おもしれえじゃねえか、相手になつてやるよー。」

奴は上に手を翳す。すると手首に俺と同じ、DAのデュエルティスクが装着された。

ただ、俺の白色と違い、奴のデュエルティスクは漆黒。黒かった。

「俺が勝つたら、お前の知つてることを全て話してもらひやんやー。」

「考えとこいやるよー」

「へへ、じべやー。」

「『テュエル（…）』」

京介 LP4000

京介？ LP4000

「先行はやるよ～」

手をヒラヒラされ、奴は後攻になることを選んだ。

「やうかい…なら、俺のターンッ！」

いきなりのことでもまだ頭が混乱してやがる…冷静になれ、俺！

「俺は『インフェルニティ・ビースト』を攻撃表示で召還…」

インフェルニティ・ビースト

ATK1600

「ひゅ～つ、かわいいわんこだこと」

「いっ…

「カードをセット…ターンエンド…」

京介 手札 4

場 インフェルニティ・ビースト

伏せ 1

まずは出方を見る。こいつがどんなカードを使うか、見させてもらう。

「へへ、俺様のターンッ」

自分とデュエルしている…妙な気分だ。

「お前が使うカード郡…インフルーティだつたか？。  
そりや無限と地獄でも合わせてんのかあ？」

なら笑えるぜ…！」

「ふん、その余裕、いつまで持つかな？」

「言つてくれるねえ…こりや楽しめそうだ…！」

俺様は手札から、《ダークロード・ナイト タナトス》を呑喰つて  
ね！」

「ツ！…！《ダークロード》だと…？」

なんだそのカードは…？名前の二コアンスから、光属性の超レアカ  
ードである《ライトロード》の逆ということか？

地面が一部、円を描いて真っ黒に染まる。そしてそこからゆっくり  
と、まるで死神のようなモンスターが現れた。

右手に刀を持ち、そして印象的なのがその背中。十字架が搔かれた、  
六角形の、人が入れそうな棺桶がいくつも浮いていた。

その禍々しい姿に、手札を持っている俺の手が震える。  
こんなモンスターがこの世に存在するのか？

タナトスは、まるで人間のような雄たけひを発し、その場に君臨した。

ダークロード・ナイト タナトス

ATK 2100

「2100……だと!?」

俺が奴のモンスターに驚いていると、おかしなことが起きた。タナ  
トスが小刻みに震え始めたのだ。

「おい、お前のモンスターはどうなつている?」

「まあ見てなつて… 今にわかつかられ」

۱۰۷

数秒後、そこで信じられないことが起きた。

なんとモンスターが奴の方を向き、そして刀で奴を切ったのだ。

【-----ツ-----】

「グアハツ！――！」

京介？ LP4000 0

「なツ――――――――――――？」

突然の出来事に俺はさらに混乱した。

そもそもそうだろう、自分の召喚したモンスターが、自分を攻撃してライフを0にしたのだから。

「つづー。やつぱ堪えるぜ」

だが奴は軽く腹を押さえながら平然と立ち上がった。  
そしてさうに俺は驚いた。

奴のデュエルディスクから、デッキのカードが全て空中にばらばら飛ばされたからだ。

「！？！？！？！？」

無数の山札は、奴の少し上後ろで、裏向きのまま停滞した。

「何がなんだかわからねえって顔してやがるな？」

当たり前だ。

「《ダークロード》モンスターの共通の効果…それは《ダークロード》と名の付いたモンスターが場に初めて出た時、プレイヤーのライフを0にしなければならないんだよ」

そこがまざおかしい。なぜお前はライフが0なのにまだ負けていいんだ？

「聞けって。やつしが第一の効果。そして第一の効果、それが今俺の山札が全てなくなつたのに関係している」

「……」

「《ダークロード》と名の付いたモンスターが初めて場に出た時、自分のデッキを全て墓地に送らなければならない。

そして今後手札にカードを加える効果はデッキからではなく、墓地からカードをランダムに手札に加えるルールに、変更される。無論、逆に手札を捨てる効果をもつカードが発動させられた場合、墓地に捨てず、デッキに加えてシャッフルするルールに変更されるつてな？」

なんてややこしいカード群だ……

「そして俺の墓地のカードが全てなくなつた時……俺はデュエルに負ける。

そのかわり墓地のカードが全てなくならない限り、いかなる場合によつても俺が負けることはない……」

く。

「……まさに《ライトロード》と間逆だな

ライトロードは墓地にカードを送る効果、そしてこいつが使つ《ダークロード》……。

逆にデッキに戻していくカード……か。

初めに代償を払い……その見返りとして力を与えるというわけだな。

（ライフ

「さあ、いくぜえ？バトルだ！！

『ダークロード・ナイト タナトス』で、『インフェルーティ・ビースト』を攻撃！  
終焉の詩！！

奴のモンスターが刀を大振ると、そこから出でてきた赤い波動によつて俺のモンスターが腐敗し、破壊された。

「ぐッ…」

京介 LP4000 3500

「ひやははははははッ…デュエルつてやつあおもしろいなあ…！  
相手のもがく姿つてやつは本当にか・く・べ・つだ…！」

奴は踏ん反り返つて高笑いし始めた。まともな精神とは思えんな…。

「はははあ！、エンドフェイズ、『ダークロード・ナイト タナトス』の効果により、俺様は墓地からランダムにカードを一枚、デッキに戻す…！」

停滞していた無数のカードから、ランダムに一枚が奴の『テュエルデイスク』の中に入っていく。

それもライトロードの逆つてわけか……。

「再び『ダークロード・ナイト タナトス』の効果により、『テッキ』の枚数×100ポイント攻撃力がダウンする」

ダークロード・ナイト タナトス

ATK2100 1900

「おかえりってな？・・・ははは！ターンエンドだーー！」

京介？ 残り墓地枚数 33枚

手札 5

場 『ダークロード・ナイト タナトス』

「その笑い、イラつくぜ…俺のターン！」

戦闘ではダメージを負わない…というから戦闘は無意味。こいつ相手にデュエルで勝つ方法はただ一つ、耐えるのみ。なんとか粘らなければ…

「俺は手札から、《インフェルニティ・デーモン》を召喚する…」

インフェルニティ・デーモン

ATK 1800

「…………」

俺の伏せは《全弾発射》……だがこいつとのデュエルでは無意味になってしまった……。

しかしこの伏せは奴を警戒、まだブラフとして使える！

「さらに魔法カード、《手札抹殺》を発動！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、その枚数分デッキからドローする！」

俺は手札4枚を捨て、そしてデッキから4枚ドローする。

「俺は《ダークロード・ナイト タナトス》の効果により手札をデ

ツキに加える・・・

そして墓地より5枚、カードをランダムに手札に加える

奴は手札をデッキに加えると、空中に浮いている5枚のカードがランダムに奴の手札に納まる。

これで奴のデッキ残り枚数は28枚・・・。そしてデッキにカードが戻ったことにより・・・。

【・・・・・・・・・】

タナトスの周りに黒い霧が発生し、それによつてタナトスが苦しみだした。

「やつてくれるねえ・・・『ダークロード・ナイト タナトス』の効果、攻撃力は500ポイントダウンだ」

ダークロード・ナイト タナトス

ATK 1900 1400

よし、これで俺のモンスターが奴のモンスターの攻撃力を上回った！。

「バトルだー！」、《インフェルニティ・デーモン》で、《ダークロ

ード・ナイト タナトス》を攻撃！  
ヘルプレッシャーーー！」

巨大な魔方陣より出た炎手によつてタナトスが押しつぶされる。

京介 LP 0

「おつと痛い痛い・・・だが俺にはダメージはねえぜ？なんたつて  
ライフがねえんだからなあ？」

んなことはわかつてゐさ。

「カードを三枚セット！、ターンエンド！」

京介 手札 二枚

場 インフェルニアティ・テーマン

伏せ 3

「へへ、俺様のターン！」

奴は腕を上に翳せる。そしてその手に一枚のカードが収まる。  
これが奴のドローなのだろう。すると奴はいきなりクスクス笑い始めた。

「ククク、どうよ、自分と戦っている感じってのはさあ？面白いだろ？」「

「・・・・・」

「そう睨むなよ、俺達は一心同体、表と裏、右翼と左翼。切っても切れねえ仲なんだからよ、もっと親しくしようぜ？」

こいつの言ひている意味はよくわからないが……関係はない。俺はこいつを倒すまでだ。

俺は奴の言葉に反応せず、ただ睨む。

「なんか反応ねえのかよ……おつもしろくねえなあ……手札から魔法、《ムーン・エクスエンジ》を発動！

手札をから《ダークロード》と名の付いたモンスターをデッキに加え、そして墓地からカードを一枚、ランダムに手札に加える！」

さしあたり《ソーラー・ヒクスチエンジ》のダークver.ってところか。

「俺様は《ダークロード・ネクロマンサー ドリュアス》を捨て、墓地よりカードを一枚手札に加える」

ドリュアス…………美しい男性や少年に対しては緑色の髪をした美しい娘の姿を現し、相手を誘惑して木の中に引きずり込んでしまう、ギリシア神話に出てくる精霊…………。

タナトスといい、ドリュアス…………ひとつやら《ダークロード》の力一ド群は神話を元にした名前らしい。

「へんー…………そりゃ、《ダークロード・ソーサラー メーディア》を守備表示で召喚……！」

ダークロード・ソーサラー メーディア

D F E 1700

仮面を被り、異様に手足が細い女性の体型のモンスターが現れる。メーディアも同じく、ギリシア神話に出てくる王女だ。

「カードをセット・・・エンドフェイズにより、《ダークロード・ソーサラー メーディア》の効果により、墓地より3枚、カードをデッキに戻す！」

またもや墓地からカードがデッキに戻る。だが奴はデッキに戻る力一ドの一枚を見て笑う。

「おっ、こいつは運がいいぜ！、俺はデッキに戻った《ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース》の効果発動だ！」

デッキに戻ったはずのカードが一枚、奴のデュエルディスクに納まる。そしてフィールドに目が紅く染まつた黒い巨人が現れた。

「《ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース》は、墓地からデッキに戻った場合、フィールドに特殊召喚することができんのさ！」

ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース

ATK 2100

これで奴の場にはモンスターが一體・・・まずいな。

「ターンエンド、くく、足掻けよ?」

京介? 残り墓地枚数 22枚

手札 4枚

場 ダークロード・ソーサラー メーデイア

ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース

伏せ 1

ダークロード・・・効果が複雑故に対処しにくいな・・・。

そもそもM&Wのルールである「4000のライフポイントを0にしたら勝ち」がないのはきつい。

デッキが0になつたら負けるルールも奴にとつては無意味、逆に助けてしまうことになる。

どうしたものか・・・・・。

「・・・俺のターン! ! !」

だが迷つてては意味がない。今はこいつを倒すことだけに集中しろ!

「ドロー! !

引いたカードは・・・・よしー

「俺は『インフェルニティ・ネクロマンサー』を守備表示で召喚!」

骸骨の魔術師が俺の場に現れる。こいつを出すのは初めてか?

インフェルニティ・ネクロマンサー

D F E 2 0 0 0

「さりにリバースカードオープン!、『全弾発射』!俺の手札を全て墓地に送り、その枚数×200ポイントのダメージを相手に『え

る!』

「ひやーははははは!!俺様にダメージなんて関係えねえって知つてるだろお?ついに頭いかれたか!?」

ダメージが目的じゃねえよ、俺の目的は・・・・ハンドレスだ!

「」のカードによつて俺の手札は0・・・・よつて、『インフェルニティ・ネクロマンサー』の効果発動!—

「あ？」

「自分の手札が0枚の時、1ターンに一度、俺の墓地に存在する『インフェルニティ』と名の付いたモンスターを一本、特殊召喚することができる！」

『全弾発射』を使ったのはこのため。運が悪いことに、手札のカードは全てモンスターカードだったのだ。

「なあらほど……それが真の目的かあ……ははっ！」

「…………（なんだ？奴の笑みは？）……俺は効果によつて、墓地から一體目の『インフェルニティ・デーモン』を召喚する！」

墓地より一體目の『インフェルニティ・デーモン』が出現する。ここまで順調……大丈夫だ、問題ない。

「そして特殊召喚された『インフェルニティ・デーモン』の効果発動！！

手札が0枚の時にこのカードが特殊召喚されたとき、デッキから『インフェルニティ』と名の付いたカード一枚、手札に加える！！俺は……『インフェルニティ・フォース』を手札に加える

！」

「デッキから一枚のカードを手札に加え、軽くシャッフル。  
そうだ、よく考えてみろ……俺は戦闘をしなくていいんだ。奴  
のデッキが切れ……つと、墓地が切れれば俺の勝ちなんだ。  
ならば耐えればいいだけ。

「カードをセット、そしてリバースカードオープン！『インフェ  
ルニティ・プレッシャー』！」

このカードならば……！！奴の戦術を全て無効化出来る！！  
『インフェルニティ・プレッシャー』が場に出たことによつて奴の  
モンスターが苦しみ出す。

ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース

ATK 2100 1800

ダークロード・ソーサラー メーディア

ATK 100 0

「あん？俺様のモンスターが？」

奴は自分のモンスターの攻撃力が減ったことに疑問を抱いているようだ。

「『インフルーティ・ブレッシャー』の効果…………それは自分の場の『インフルーティ』と名の付いたモンスターの数×100ポイント、相手のモンスターの攻撃力をダウンさせる……さらに、このカードが存在するかぎり、『インフルーティ』と名の付いたモンスターは戦闘では破壊されない……」

「ち…………めんどくせえ……」

お、初めて表情を崩したな？

「ただこのカードが場に存在している限り俺はお前に戦闘ダメージを与えることができないが…………まあ、お前には関係ないだろう？」

ライフを削る必要がないため、このカードはお前と相性最悪つてわけだ。

さあ、攻めるぜ？

「行くぞ、バトルだ！！『インフルーティ・デーモン』で、『ダークロード・ソーサラー メーディア』を攻撃！！ヘルプレッシャー！！」

「やせるかよー！」「ラップ発動！『攻撃の無力化』……この効果によって、バトルフェイズを終了させるぜえ……」

紋章から出た腕は渦のようなものに巻き込まれ、消えていった。

「くそ…………だがもつお前は終わつたも同然だ、ターンエンドー。」

京介 手札0

場 インフェルニティ・デーモン×2

インフェルニティ・ネクロマンサー

伏せ 1

インフェルニティ・フレッシャー

「いやくらいで勝った気になつてんじゃねえぞ…………？俺様のターン……！」

それは俺も解つていい。この程度で奴を攻略できるとは思つていない。

事実、《インフェルニティ・プレッシャー》が破壊されれば、俺は危うくなる。

(だが……)

俺の伏せの一枚……その中の一つ、《インフェルニティ・フォース》は、相手の攻撃宣言時にそのモンスターを破壊して、墓地よりモンスターを召喚する効果だ。

墓地には鉄壁の《インフェルニティ・ガーディアン》がいる。もし《インフェルニティ・プレッシャー》が破壊され、攻撃されてもまだ手は残っている。

そしてさうにもう一枚の伏せ……それは《インフェルニティ・ブレイク》。

墓地の《インフェルニティ》と名の付いたカードを除外して、フィールドのカードを一枚破壊する効果だ。

もし何らかでこの二つが破壊されたとしても、まだこのカードがある。つまり、戦闘耐性、攻撃耐用、破壊可能の三拍子が今俺が出来ることが。

さあ来い…………!!。

「ドローッ…………はんっ！俺は《ダークロード・ソーサラー》メーディア》を守備表示から攻撃表示に変更し、効果を発動！！」

む？

「UJのカードが守備表示から攻撃表示に変わった時……そのターンに一度だけ、相手の発動した魔法、罠の効果を無効にして、破壊することが出来る！！」

なッ！？

「ははははははッ！！！！！どんな戦術を考えていたのかは知らねえけどよお？俺様にはそんなん無意味なんだよ！！」

そしてえ！…、《ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース》を生け贋にい！！」

いきなり吹き出した漆黒の霧がヘーラクレースを包み……

「絶望を示せえ！…来い！…」

やがてその霧はヘーラクレースをすっぽり包み込み、丸い球体と変化する。

「《ダークロード・デビル ルシファー》ああ！…！」

「…………」

そして霧球体の中から大きな、漆黒の翼が生えてきた。  
だんだん黒霧が無くなり、中から紫の体をした、頭に2本の大きな角を生やした墮天使が現れた。

ダークロード・デビル ルシファー

ATK 2500

【…………、…………、…………、…………】

「こいつ、笑つてやがる…………。

ルシファーは俺を見て小さく笑ったのだ。

「ははは……、こいつもお前を倒すのが楽しみなんだよ————！」

神に反逆し、結果天界を追放、つまり墮天された神、それがルシフ  
ア————。

「そしてえー、『ダークロード・デビル ルシファー』の効果を発  
動ッ！！  
くらえやあ————明けの明星イツ————！」

ルシファーは両腕を左右に広げた。するとその手のひらに漆黒の弾が作成され、それを俺のフィールド目掛けて投げつけてきた。

「ぐああああああッ！……！」

凄まじい衝撃が俺を襲い、フィールドを見ると…………何！？

「デーモンと伏せ一枚だけだとッ？ 一体何がッ！？」

俺の場には《インフェルニティ・デーモン》一体と、伏せた《インフェルニティ・ブレイク》しか残っていなかった。

「ひやははははっ！！！ 『ダークロード・デビル ルシファー』の効果、それは《ダークロード》と名の付いたモンスターを生け贋に捧げてこのモンスターを召喚した場合！、

墓地のカードを5枚ゲームから除外することで、相手フィールド上のカードが一枚になるように破壊することができるのさあ……！」

「…………ぐう、マジかよ……」

おそらく《ライトロード・エンジェル ケルビム》の逆veterだろ

うが、なんだその鬼畜効果は！！

場のカードが一枚になるように破壊するとは……これはやばいぞ。

「俺様はコストによつて墓地よりカードを5枚、ゲームから除外する……ひやははは！？、続けていくぜ！？  
バトルだッ！『ダークロード・デビル ルシファー』の攻撃！！  
食らえや！ハルマゲドンッ！？」

「…」

地面から亀裂が入り、そこから紫の光が指してき、

「ツグあああああッ！…」

まるで業火の中にいるよつた、凄まじい熱気が俺に襲いかかつた。

【…】

デーモンはその業火に耐えきれず蒸発してしまつ。すまない……  
デーモン。

京介 LP3500 2800

「…………ちい！」

その痛みに耐えきれず膝をつぐ。

「ひやははははははははははツ！……地獄の業火の味はどうですかあ～！？」

「…………ツ」

まずい……な。

「続けて『ダークロード・ソーサラー メーティア』の攻撃だあ、ほら行け、！蛇遣いの術！！」

仮面より飛び出してきた蛇が俺に噛みつく。

「ツ……」

京介 LP2800 2700

「はあ……はあ……」

まづい…………な。俺の場には黒の『インフェルニティ・ブレイク』のみ。手札も0……。

「…………」

そして奴の場には攻撃力2500のモンスター……。

「ほりほりあ？」などといひで倒れんなよ？立て立て？

「…………」

俺は……勝てるのか？」「こいつに？

手札 0

場

伏せ 1

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

京介？ 残り墓地枚数 16枚

手札 4枚

場 ダークロード・ソーサラー メーディア

ダークロード・デビル ルシファー

### 【ダークロード】

「遊戯王～無限の地獄～」六話で登場した「ダークロード」と名のついたモンスター群。

全てのモンスターが闇属性で統一されしており、その多くが墓地からカードをデッキに戻す効果やそれに関連した効果など、異様な持つている。

名前からして【ライトロード】と何らかの関係がありそうだが、今のところ不明。

現在のところ、京介の闇？が使用した5種類のダークロードが以下の共通する誘発効果を持つ。

「ダークロードと名の付いたモンスターが、デュエル開始時に初めて自分フィールド上に表側表示で召喚、特殊召喚、反転召喚された時、自分のライフポイントを0にしなければならない。

さらに自分のデッキを全て墓地に送り、今後デッキから手札に加える公式ルールは墓地からランダムに手札に加えるルールに変更される。

このときプレイヤーは負けにはならず、墓地のカードが全て無くな

つた時点で負けとなる。

自分のエンドフェイズ毎に、墓地からカードをランダムにX枚テックに戻してシャッフルする。

## 第七話 断罪（前書き）

正直に言つます。この小説の存在を忘れていました。

楽しみにしてた方、ごめんなさい。

あと、『インフェルーティ・ガン』の効果が、現実と一緒に壊れカーデになつてるので、弱体化させました。

2体 1体のみ

3月25日 プレイミスを発見してしまいました。  
ちゃんと確認して投稿するべきでしたね…。

今現在、この展開を修正するオリカラ考案中です。  
なのでしばらくは修正することが出来ません。  
しばらくお待ちください。

楽しみにしていた読者の皆さん、本当に申し訳ありませんでした。  
このような誤字脱字ミスが多い作品を見せてしまって…。

## 第七話 断罪

「……ドローッ」

「お？ まだやれる気力があつたか！ そういうなくちやなあ～」

「うっせえ、主人公がこんなとこで負けるはずねえだろ。  
俺はドローしたカードを見る。」

(…《インフルーティ・ミラージュ》か)

自身をリリースする事によつて墓地から《インフルーティ》と名  
のついたモンスターを二体召喚する効果を持つこのカード、  
当たりと言えば当たりなのだが…。

「……攻撃力2500…」

そう、相手フィールドで俺を睨んでいる奴のルシファーは攻撃力が  
2500なのだ。よつて現時点俺の低火力デッキ内でこの攻撃力を  
超えるモンスターはいない。

《インフルーティ・ミラージュ》でいくらモンスターを召喚しよ  
うが破壊されるのは目に見えている。

唯一凌ぐことの出来る可能性としては《インフェルニティ・ガーディアン》だが、生憎今墓地にはそのカードはない。仮に召喚できたとしてもそれで何ターン持つか……。

……ソレはデッキと墓地とで相談だな。

「俺は、《インフェルニティ・マラージュ》を召喚ー！」

西洋人形のようでそうでないモンスターが現れる。ぶつちやけキモイ。せつさじご退場願おつ。

「そして自身の効果を発動！」このカードをリリースし、墓地より《インフェルニティ》と名のついたモンスターを一体、特殊召喚するー！」

なぜか反応したデュエルディスクから、《インフェルニティ》のカード群が取り出される。

とは言つてもあるのは《インフェルニティ・デーモン》×2《インフェルニティ・ネクロマンサー》《インフェルニティ・ビースト》のみ。

必然的に選べられるのはこの一枚だ。

「俺が蘇生するのはこの一體！！ 現れる、《インフェルニティ・

『デーモン』！『インフェルニティ・ネクロマンサー』！

「……け、粘るねえ」

考えればまだ手はある。慎重に行け、俺。

「『インフェルニティ・デーモン』が特殊召喚され、尚且つ手札が0枚の事で効果発動！！ デッキより『インフェルニティ』と名のついたカードを手札に加える」

俺は、デュエルディスクよりデッキを取り、全体的に眺める。

(……ここでの選択が重要になつてへる)

数々の『インフェルニティ』からどのよくなコンボをすることで奴を倒すことが出来るだろうか。

「……」

一応伏せてある『インフェルニティ・ブレイク』はまだある。この効果を使えば奴の『ダークロード・デビル・ルシファー』を倒す事は容易だろう。

だが……

「へつへつへつへ……」

あの男がそれに気付いていないはずがない。おそらくなんらかの策があると考えていいだろう。

しかし今奴の場に伏せカードはない、つまり……

（ルシファーが破壊されても別に構わないって事か）

まだ手札は4枚あるんだ、あれを越えるモンスターが現れても不思議ではない。

だとするとそれも想定して選ばなければいけない。

「《ビースト》……ダメ、《ドワーフ》……ダメ、《ブレイク》……ダメ  
…………む？」

これは……そうか……このカードがあつた…… とすればこの効果でアレをああすれば……。

頭の中でコンボが繋がっていく。そしてその繋がった先は、

（勝利！……）

「俺が手札に加えるのは《インフェルニティ・ガーディアン》……」

俺はデッキから一枚抜き取つて相手に見せた。

「壁モンスターで来たかよ……んでも忘れてないよなあ？　お前はもうこのターンの召喚は済ましてんだぜい？」

「わかつている……そう焦んなよ。さらば、《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果を発動！　墓地より、一體目の《インフェルニティ・デーモン》を召喚する……！」

勝利への軌跡……その目でしかと見る！

「《インフェルニティ・デーモン》の効果発動、再びデッキから持つてくるカード……それは……！」

シユツと再び一枚のカードをデッキから抜き取る。  
そのカードは、

「《インフェルニティ・ガン》……！」

「いんふえるにてい…がん？」

ふふん、貴様はこのカードの効果を知らんだろう、この無茶苦茶な効果を。

「俺は永続魔法、《インフェルニティ・ガン》の効果発動！！ ターンに一度、手札の《インフェルニティ》と名のついたモンスターを墓地に捨てることができる。

俺の手札は《インフェルニティ・ガーディアン》のみ。よってこのカードを捨てるぜ」

「はん、そんだけかよ。んなカードディスクアドバンテージの塊じやねえか。一体なんの意味があるってんだ？」

「おおつと、効果がこれだけと思つちやいけねえぜ？」

「…ああ？」

「本命はこつちさー！ 僕は《インフェルニティ・ガン》の第一の効果を発動！！

このカードを墓地に送ることで、墓地に存在する《インフェルニティ》と名のついたモンスターを一体、特殊召喚する…！」

「……ちい

「俺は《インフェルニティ・ガン》を墓地に送り…墓地より現れる、《インフェルニティ・ガーディアン》…！」

骸骨とうじょーう！勿論守備表示だぜ。

「さらにリバースカードオープン！！《インフェルニティ・ブレイク》！ 墓地にある《インフェルニティ・ビースト》を除外し、「

ピッヒ、俺は《ダークロード・デビル ルシファー》を指差す。

「そのきしょいモンスターを破壊する…！」

「つ…！」

【…………】

とても人間とは思えない…いや、人間じゃねえか。文字通り悪魔の悲鳴を挙げながら、奴のモンスターは塵になった。

「バトルだ！ 一体目の《インフェルニティ・モン》で、《ダークコード・ソーサラー メーディア》を攻撃、ヘルプレッシャー！」

つしゃあ――全滅！ でもまだ終わりじゃないん――

京介 LP 00

「つう……はあ……俺にはダメージは関係ねえよ……」「…………」

「わあーてるさ、だからただの嫌がらせだ」

「ああ！？」

「二体目の『インフルニティ・デーモン』でダイレクトアタック  
ヘルプレシャーVer.2-!-」

勝手に命名。デーモンもなにやら格好つけていいるよつので満更でもなさそうだ。

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ମହାନାଳୀ ପରିଷଦ୍ୟ

京介 L P 0 0

「L P 無くとも痛みくらいはあんただろー！ どやーーー？」

手札の状況から四体も場に並べることが出来た。

しかもシユミレーションなどおり《インフェルニティ・ガーディアン

》もいる事から、あとは時間稼ぎでいいだろう。

「…うぜえなあ…」

「お？」

「うぜえよ…」主人様よー？ 何いい気になつてやがる…調子のん  
じやねえよ…」

「…ターンエンド」

少し興奮しすぎたみたいだ。冷静になれ、俺。クールに、だ。

京介 LP2700

手札 0

場 インフェルニア・デーモン×2

インフェルニア・ネクロマンサー

インフェルニア・ガーディアン

伏せ 0

「舐めんなああああああああああああッ！――！」

「俺様のターン！――！」

「つ――」ええ

「ルシファー！」と力を倒して喜んでんじゃねえよ…俺にはまだ切り札があんだよ」

「…やはり、か」

「俺様はあー！ マジック発動！！ 『极限の絶望』！ 相手のライフポイントが自分のライフポイントより5倍以上多い時に発動する事が出来る…！」

「5倍以上少ない時だと…？ 貴様のライフは〇のはずじゃ…ってあああああああ…！」

…まさか、 $0 \times 5 = 0$ だって言いたいのか。せこいぞ…！…

「！」の効果により俺様は墓地からカードを5枚、デッキに戻す…

? 自分で自分の墓地を削るのか…?

「『极限の絶望』の効果…それはデッキから墓地のカード枚数×100の攻撃力以下のモンスターを手札に加えることが出来るのさあ

…」

「なん……だと……？」

「現在の墓地のカードは残り10枚……よつて俺は攻撃力1000以下のこのモンスターカードを一枚、手札に加える……！」

「…………」

「…………てめえに地獄を見せてやるよお……」

「…………」

「デュエル中、一度でもフィールドに出た《ダークロード》モンスターが5体以上の時……、そのカードを全て除外する」とこのカードを特殊召喚する……！」

奴のテッキ、墓地から5枚のカードが排出された。

「俺様は、

《ダークロード・ナイト タナトス》……

《ダークロード・ネクロマンサー ドリュアス》……

《ダークロード・ソーサラー メーディア》……

《ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース》……

《ダークロード・デビル ルシファー》

を除外し、「

奴が一枚のカードを上に翳せる。

「ダーカクロード闇道の闇に飲まれるがいいッ！－！現れるー！－！『断罪の龍』ー！」

「シ！…！」

何か喋つた…あの龍は何かを喋つた！！  
しかしその言葉はもう言葉ではない。

次元が違つた。人間に聞けない『聾き取る事さえできなし』音

やがて裂け目から勢いよく、巨大な『何か』が飛び出してきた。

[ ]

相変わらず理解できない、その意味を考える事さえできない『音』を発しながらその龍はフィールドに『君臨』された。

# 『断罪の龍』

ATK ¶ §

「…攻撃力が…」

「へつへつへつへー！　てめえら人間」ときじやあ、こいつの攻撃力さえ理解出来ねえよー！」

「...」の文

もし「この世に悪魔というものがいたら… そんな生易しい考え方だめだな。

暗く、漆黒の霧に隠れてその龍は姿を確認できないが、その中で光る二つの眼光、それを見ているだけで震えが止まらなかつた。

「…恐怖で竦み上がってやがるなあ？ そうだよそれでいいんだよ  
俺様は《断罪の龍》の効果を発動！！

」  
「！？」

京介 LP27000

## 俺の心に

闇が生まれた。

## 第七話 断罪（後書き）

『断罪の龍』 閻

???族 効果

『Despair in all living things  
and the conviction I exist. are  
ose by servants in the under-

Let's esteem their intentions.

Power is given the person who  
cuts down the life often for  
me.

Power to annihilate the enemy,  
and power to destroy the horses  
from the space and power to  
cut down all lives

ATK  
¶ / DFE  
¶ §

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2610p/>

遊戯王GX ~無限の地獄~

2011年10月7日18時06分発行